

# VIEW21

ビュー21

2014

Vol. 2

中学版

## 特集

# 広がる学力格差への 多様な取り組み

**学校事例** 青森県 青森市立沖館中学校 / 東京都 立川市立立川第一中学校  
福岡県 朝倉市立十文字中学校

**対談** 上智大 総合人間科学部教授 **奈須正裕** / ベネッセ教育総合研究所 初等中等教育研究室長 **木村治生**



私を育てた  
あの時代、あの出会い

**一人ひとりの教員の成長を親身になって考え、叱ってくれた**  
埼玉県 東松山市立北中学校校長 **長壁 宏**

Benesse発  
これからの教育

**多彩な体験で育むグローバル・リーダーの素養** 奈良県・私立西大和学園中学校

ミドルリーダーの挑戦  
一前へ! 前へ!!

**生徒に寄り添いつつも、教え過ぎず、自主性や協働性を育てたい**  
滋賀県 大津市立仰木中学校 **高塚将吾**

## 特集

## 3 広がる学力格差への多様な取り組み

4 課題整理

## 学力格差拡大の実態と課題

6 学校事例 1

## 学習指導と共に学級づくりを重視し、学習環境を整える

青森県 青森市立沖館中学校

10 学校事例 2

## 学力層別の補習や通知表の活用で、全ての学力層にきめ細かく対応

東京都 立川市立立川第一中学校

14 学校事例 3

## 志を高め、上位層がけん引する学校づくりで、全体を底上げ

福岡県 朝倉市立十文字中学校

18 学校事例 4

## 全国の学校が挑戦する多様な取り組み

20 対談

## 「知識の習得」から「意味理解」へ、「学習の本質」の捉え直しが、学力底上げの鍵

上智大 総合人間科学部教育学科 教授◎奈須正裕

ベネッセ教育総合研究所 初等中等教育研究室長◎木村治生

## 特別企画

## 26 グローバル社会を生きる子どもたちへの英語教育で大切なこと

ベネッセ教育総合研究所「中高生の英語学習に関する実態調査」の結果から

## 30 ワークショップ型の校内研修で同僚性を育み、学校力を高める

## 連載

1 私を育てたあの時代、あの出会い

## 一人ひとりの教員の成長を親身になって考え、叱ってくれた

埼玉県 東松山市立北中学校校長◎長壁 宏

24 Benesse発 これからの教育

## 多彩な体験で育むグローバル・リーダーの素養

奈良県・私立西大和学園中学校

28 ミドルリーダーの挑戦 ―前へ!前へ!!

## 生徒に寄り添いつつも、教え過ぎず、自主性や協働性を育てたい

滋賀県 大津市立仰木中学校◎高塚将吾

32 読者のページ Reader's VIEW / 編集後記

\*本文中のプロフィールは全て取材時のものです。

また、敬称略とさせていただきます

\*本誌記載の記事、写真の無断複写、複製及び転載を禁じます

# 一人ひとりの教員の成長を 親身になつて考え、叱つてくれた

埼玉県 東松山市立北中学校校長 **長壁 宏** OSAKABE HIROSHI

教師は日々、さまざまな働き掛けの中で生徒を育てる。そして教師は、共に働く仲間との出会いの中で育っていく。出会いから学んだ教育の原点、そして次代を担う若い世代に伝えたい不易を、長壁校長が語る。

どんな時も自分を見て  
叱り、褒め、助言してくれた

新任時代の私は、小川正校長から授業や生徒指導のことなどで、毎日のように叱られていました。あまり叱られ続けるものだから、新任1学期の時点で「自分は教員には向いていないから辞めよう」と心に決めていたぐらいでした。

しかし、その夏休み前のことです。その日、私は小川校長から、教育事務所の所長を研修会場に車で送迎するように頼まれました。その車中で所長から「教員生活にはもう慣れた

か」と聞かれ、教員を辞めようと思っていたことを正直に伝えました。すると所長は意外そうな声で、「小川先生からは『うちでいちばん有能な若手が迎えに行きますから』と聞いたんだけどなあ」と言われるのです。私は驚きました。小川校長が自分のことをそんなに評価してくれているんだなんて……。今思うと、小川校長は私への期待を遠回しに伝えるために、所長にこっそり頼んでいたのかもしれない。いずれにしても、私はあのひと言で「もう少し頑張ろう」という気持ちになれたのです。小川校長と一緒に働くうちに気付



おさかべ・ひろし 海上自衛隊航空学生の後、大学に入学。26歳の時に教職に就く。専門科目は理科。吉見町立吉見中学校教諭、玉川村教育委員会事務局長、東松山市立東中学校教頭、坂戸市立北坂戸中学校校長などを経て現職。

1981 (昭和56)  
吉見町立吉見中学校  
に新採で赴任。  
小川正校長と出会う

1990 (平成2)  
玉川村立玉川中学校  
に赴任

1995 (平成7)  
埼玉県立小川少年  
自然の家に  
指導主事兼事業課長  
として勤務

1999 (平成11)  
玉川村教育委員会  
事務局長に着任

2004 (平成16)  
東松山市立  
東中学校に  
教頭として赴任

2008 (平成20)  
坂戸市立  
北坂戸中学校に  
校長として赴任

2011 (平成23)  
坂戸市立  
千代田中学校に  
校長として赴任

2013 (平成25)  
東松山市立  
北中学校に  
校長として赴任

いたのは、校長は叱る時も、教員に深い愛情と意図をもって叱っているということでした。ある時、私が給食の時間になっても職員室で生徒のノートの添削をしていると、「今の時間を何だと思っているんだ。給食の準備の時間だろう。教室に行け！」と大声で言われたことがあります。しかし、その時は私も「うちは担任がいなければ給食の準備が出来ないようなクラスではありません！」と怒鳴り返してしまいました。

その日の昼休み、私は校長室に呼ばれると、静かな口調でこう言われました。「俺はおまえのことをよく見ているから、おまえのクラスが生徒だけでちゃんと給食の準備が出来ることは知っている。でも、何が起きるか分からないのが教室なんだぞ」と。とても納得すると同時に、「俺はおまえのことをよく見ているから」という言葉が心に響きました。

小川校長は、職場が別々になっても私の仕事ぶりを見守ってくれていて、「おまえは勉強不足だから大学院で勉強してこい。ちょうど県が長期研修の募集をしているから」というように、声を掛けてくれました。どうすれば私が教員として成長

## 「悩みや課題を共有してこそ 集団として一体感が生まれる」



を遂げることが出来るか、常に親身  
に考えてくれていたのです。

**好きなことに取り組む時が  
人は最も成長する**

私も今、校長という立場になりました。小川校長と同じく、私も「教員一人ひとりにしっかり目をかけ、伸ばしたい」という思いで先生方と向き合っています。教員の「自己評価シート」には、「今年いちばんやりたいこと」を書かせ、それが子ど

ものためになることが確認できれば、即実行させています。そして随時、「おまえのお陰で良くなった」と声を掛け、言葉で成果をたたえるようにしています。人は自分がやりたいこと、得意なことに取り組んでいる時が最も成長するからです。

教員が意欲を持って楽しそうに働いている学校は、生徒にとっても楽しい学校になります。そして、生徒が楽しそうに通っている学校は、保護者にとっても子どもを通わせて良

かったと思える学校になります。

私がもう一つ大切にしているのは、教員集団としての一体感です。私が荒れの状態にあった学校に赴任した時、教員の関係はバラバラで、会話が少なく、職員室はとても静かでした。そこで、それまで学年別に置いてあったコーヒーマーカーを1カ所にまとめ、美味しいコーヒーマーカーにもこだわり、先生方の交流の場にしました。雑談をしながら、課題や悩み、生徒の情報を共有するようになればと考えたのです。

また、毎回2時間掛けていた職員会議を30分に短縮させました。会議を短時間で終わらせるために、事前に関係者で話し合った方が、教員同士で中身のある議論が出来るからです。小さなことでも続けるうちに教員間に一体感が生まれ、次第に取り組みが活発になりました。すると、生徒の荒れも収まっていったのです。

校長は、生徒と直接向き合う時間は限られています。ですから、校長のいちばんの役割は、教員をやる気にさせることで、学校を元気にすることです。小川校長のように、一人ひとりの教員の成長を心から願える校長でありたいと思います。



# 広がる学力格差への 多様な取り組み

多くの学校で課題となっている「学力格差の拡大」だが、

『VIEW21』の読者モニターの先生方からも

「大変な課題だが、学校が正対して取り組むべきこと」

「確かな学力がますます必要とされている。」

「中位層も含めて、低学力層をいかに底上げするかが課題」

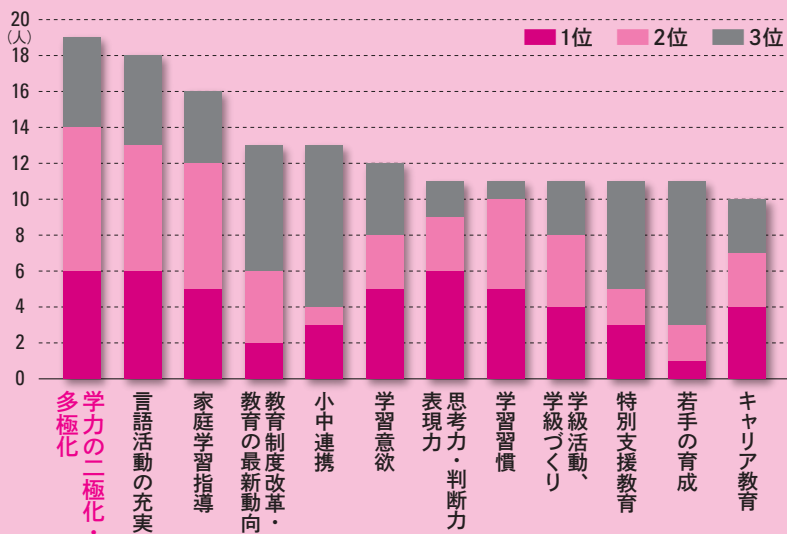
といった声が寄せられている。

今号では、広がる学力格差にどのように対応すればよいのか、

さまざまな観点で取り組む学校事例を基に追究する。

特集テーマ希望の1位は「学力の二極化・多極化」

Q. 『VIEW21』で扱ってほしい特集テーマをお聞かせください

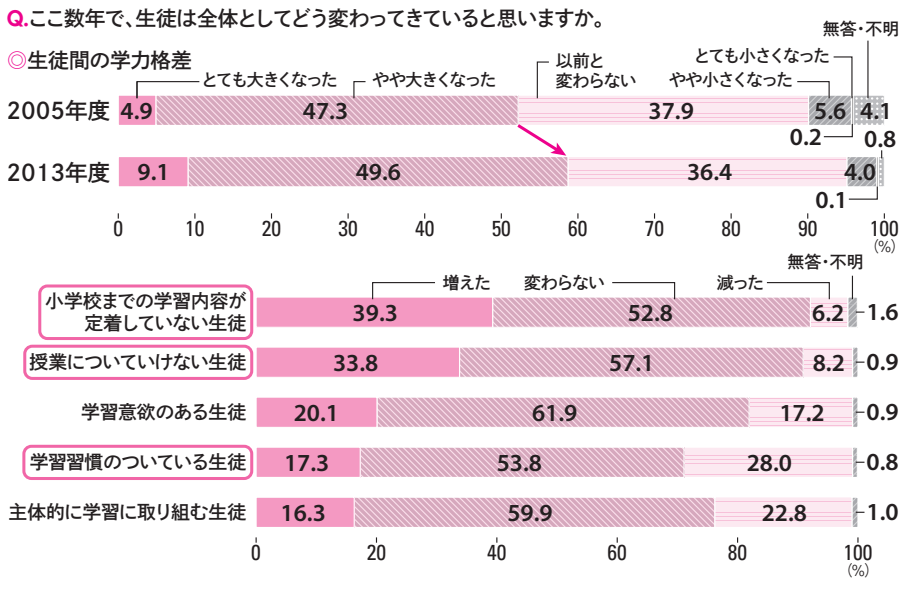


\*41のテーマの中から、上位3つまでを選択して回答。10票以上あったテーマのみ抜粋  
出典／『VIEW21 中学版』読者モニターアンケート（2013年11月実施。回答数82）

# 学力格差拡大の実態と課題

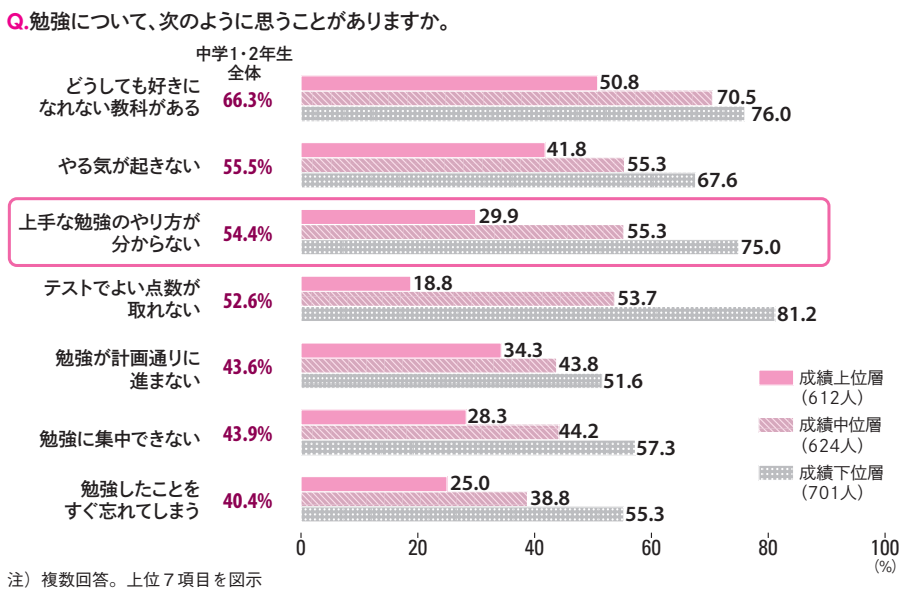
ひと口に「学力格差の拡大」といっても、さまざまな要因がある。ベネッセ教育総合研究所の調査結果を通して、学力格差の実態と課題を整理した。

図1 「学力格差は大きくなった」という回答が約6割に増加



「ここ数年で、生徒間の学力格差が大きくなった」と感じている教員は、2005年度に比べて6.5ポイント増え、58.7%となった。「小学校までの学習内容が定着していない生徒」や「授業についていけない生徒」が「増えた」と感じている教員が、それぞれ39.3%、33.8%もいることが背景にあるといえよう。更に、「学習習慣のついている生徒」が「減った」と感じている教員が28.0%に上っていることも、着目すべきだろう。

図2 学習上の悩みで、成績別の差が大きいのは、「上手な勉強のやり方が分からない」

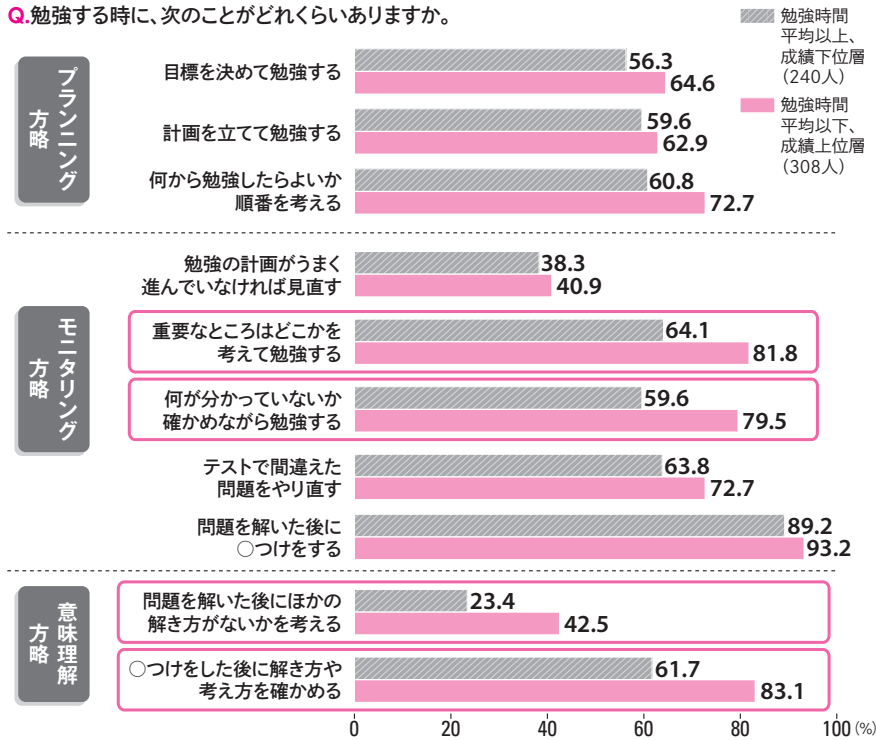


注) 複数回答。上位7項目を図示

学習上の悩みを成績層別に見ていくと、上位層と下位層で最も差が開いているのは「テストでよい点数が取れない」であり、次いで「上手な勉強のやり方が分からない」だった。勉強方法が分からないことが、「勉強が計画通りに進まない」「勉強したことをすぐ忘れてしまう」にも影響している可能性がある。下位層の学力底上げには、勉強の仕方を指導することも重要といえそうだ。

# 広がる学力格差への多様な取り組み

図3 「効率的に勉強する子」ほど、意味を考えながら効果的に学習している

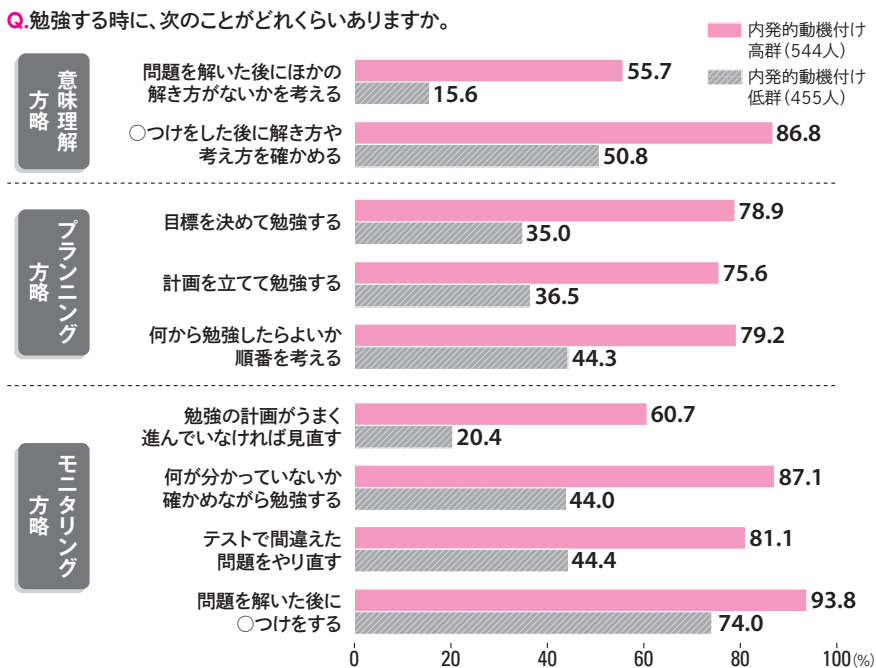


注1) 「よく」+「ときどき」あるの% 注2) 中学1・2年生の合計値

学習時間が平均より短くても成績が上位層の子どもと、学習時間が平均より長くても成績が下位層の子どもとで、学習方法を比較すると、15ポイント以上の差が見られたのは、「意味理解方略」の2項目と、「モニタリング方略」の2項目だった。この4項目を見ると、上位層の子どもほど「重要などころを考える」「分かっていない点を確認する」「他の解き方を考える」「○つけをした後に考え方を確かめる」と、学習内容の意味と、自分がきちんと理解しているかいないかを自ら確認しながら学習を進めている様子が見える。

学習時間(量)はもちろん大切だが、「学習方略」をきちんと身に付けることも重要であると示している。

図4 「内発的動機付け」が高い子どもは、さまざまな学習方略を取り入れている



注1) 「勉強の理由」の内発的動機付けを尋ねている3つの質問項目から総得点を算出し、内発的動機付け「高群」「中群」「低群」と3分割した。図は中群を除いて示している 注2) 「よく」+「ときどき」あるの% 注3) 中学1・2年生の合計値

学習の動機付けの高低によっても、用いる学習方略の比率に違いが見られる。

内発的動機付け(内容に対する好奇心や関心によってもたらされる動機付け)が高い子どもは、いずれの方略も使用率が高く、さまざまな学習方略を取り入れて勉強している様子が見える。更に、内発的動機付けが低い子どもとの差も大きい。自ら学ぼうとする意欲がなければ、自分に合った学習方法を試そう、使おうとする気持ちが起きにくい。学習の中で子どもたちの関心や好奇心を引き出すことは、学習の量と質にプラスの影響を与え、学力向上につながるという。

学校段階が上がるにつれて、学ぶこと自体の楽しさ、新しいことを知るうれしさといった「内発的動機付け」は弱まる傾向が見られる。いかにそれを食い止めるか。本質的に問い続けなければならない課題でもある。

図1 出典/ベネッセ教育総合研究所「中学校の学習指導に関する実態調査報告書2013」(2013年4~7月実施。全国の中学校の主幹教諭・教務主任3,475人)  
 図2~4 出典/ベネッセ教育総合研究所「小中学生の学びに関する実態調査」(2014年2~3月実施。全国の小学4年生~中学2年生とその保護者。親子で各5,409人)  
 ※関連データの掲載は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイトに2014年10月中を予定

# 学習指導と共に学級づくりを重視し、学習環境を整える

## 青森県 青森市立沖館中学校

沖館中学校では、基礎・基本の充実を指導の中心に据え、毎日の掃除終了後のST（スタディタイム）やチーム・ティーチングなどで生徒の学力差に対応している。生徒指導と学習指導をリンクさせた学級づくり、生徒と教員の信頼感の醸成があらゆる指導の土台となり、全国平均を大きく上回る学力を実現している。

### ◎ 取り組みのねらい

**多様な学力層にあっても  
生徒の進路希望をかなえたい**

北に青森湾を望み、フェリーターミナルや商店街などが集まる青森駅。そこから車で10分の住宅街に沖館中学校がある。保護者は会社員や公務員が多く、大学進学まで視野に入れている家庭は多いが、都市部ほど塾があるわけでもない。また、経済的に恵まれない家庭も3割程あり、人の話が聴けない、板書を正確に写せない、忘れ物が多く、教科書さえ忘れるという生徒も多かった。家庭環境が多

様で、学力層も幅広い生徒たちの進路希望をかなえるために、同校では基礎・基本の定着に重点を置き、学力上位層から下位層までを視野に入れた手厚い指導を実践している。

生徒のあいさつや身だしなみは素晴らしく、笑顔で学校生活を送っているが、5、6年程前には、深刻な荒れに直面したことがあった。2008年度に赴任した音楽科の小野優子先生は当時を次のように振り返る。

「私が赴任した年は、教員への暴言、授業妨害などもあり、授業が成立しないことも多くある状況でした。ただ、その年の1年生だけは落ち着いていたので、先生方は『この学

### School Data

◎ 1947（昭和22）年に開校。教育目標は「自ら学び心豊かにたくましく生きる生徒」の育成。全校いじめ防止集会や学期1回の道徳強調デー、生徒リーダー育成など、生徒の自主性・主体性を伸ばす生徒指導を重視している。



校長◎ 櫻庭寿一先生

生徒数◎ 565人 学級数◎ 18学級（うち特別支援学級1）

所在地◎ 〒038-0002 青森県青森市沖館 5-19-1

TEL◎ 017-781-0855

URL◎ <http://www.aomoricity.ed.jp/okidatechu/>

公開研究会◎ 未定

年から学校を変えていこう」と決意をし、学校の立て直しに取り組みました」

生徒指導の徹底を始め、教員への信頼感の醸成、基礎・基本の定着を図ったところ、1年程で学校は落ち着きを取り戻した。以来、生徒指導を基盤にした学習指導、教員が生徒に寄り添う指導、「耳と目と心で聴く」態度の育成が、同校の教育活動の基調となっている。

### ◎ 学力層に応じた学習指導①

**毎日の掃除終了後のSTで  
学力中・下位層を下支え**

基礎・基本の定着を重視する同校の取り組み



## 広がる学力格差への多様な取り組み

みの中で、主に中・下位層の学力の下支えに効果を上げている取り組みが、毎日、下校前に行う**ST（スタディタイム）**だ。掃除終了後、帰りの会が始まるまでの10分間、自学自習に取り組む。

内容は、学年・学級の裁量に任されているが、市販の教材を基に作成した基礎・基本のプリントが中心だ。英語科の太田巧先生のように、覚えてほしい20語程の単語リストを配り、10分間で書いて覚えさせることもある。3年生になると、高校受験を意識して、基礎的な入試問題に取り組みさせる。早めに終わつた生徒は、宿題や発展問題に取り組みでもよい。教務主任の野口七重先生は、そのねらいを次のように説明する。

「家庭環境が多様なので、とにかく10分間は落ち着いて自学自習をさせ、机に向かう習慣を身に付けさせることが最大のねらいです。少しでも問題が解けるようになれば、もう少し続けてみよう」と、家庭でも自ら学習に向かえるようになると期待しています」

定期考査前の3日間は、「**学習強調期間**」として、STの時間を30分間に延長する。定期考査に向けての学習時間を共通で確保し、家庭でもテスト対策に意識を向けさせるねらいがある。学習内容は、生徒が自分で教材を用意したり、教員が用意したプリントに2教科各15分で取り組んだり、学年・学級によってさまざま。教員が用意したプリントから定

期考査で類似問題を出して達成感を味わわせ、次のSTに向けたモチベーションを高めることもある。

### ● 学力層に応じた学習指導②

#### TTや発展的なプリントで 学力的上位層にも対応

学力格差への対応として習熟度別授業を行う学校も多いが、同校では、学び合い活動を重視していることもあり、数学と英語の授業で**TT（チーム・ティーチング）**を採用される。問題演習で手が止まっている生徒に個別指導をしたり、授業に集中できていない生徒に注意を促したりするほか、早めに問題演習が終わった生徒に発展問題を解くよう指示



写真 授業では扱えない発展的な問題を中心にプリントを作成。学習塾に通っている生徒が少ないこともあり、発展的な教材に対する生徒の意欲は高い



青森市立沖館中学校 校長  
**櫻庭寿一** さくらば・じゅいち  
「教員がリソースであり、声を掛け続けることで、生徒が変わる」



青森市立沖館中学校  
**野口七重** のぐち・ななえ  
教務主任。数学科担当。「笑顔を大切に、ありがとう、ごめんなさい」を素直に言える生徒を育てたい」



青森市立沖館中学校  
**太田巧** おおた・たくみ  
特別活動指導部。英語科担当。「生徒の自主性の尊重と、教員主導の各場面を明確にし、生きる力を育てたい」



青森市立沖館中学校  
**小野優子** おの・ゆうこ  
特別活動指導部。音楽科担当。「合唱を通して仲間を大事にする生徒を育てたい」

するなど、上位層が「浮きこぼれ」をしないようにすることもTTの役目だ。なお、初任教員をベテラン教員の授業にTTとして入れ、その指導ノウハウを間近で見、授業力向上に結び付けることも行っている。

授業以外でも、主に上位層向けには、国数英理社の5教科で「**発展プリント**」を活用する。教科担当が作成した問題演習プリントを廊下に置いておき、生徒は各自で持ち帰って取り組む（写真）。答え合わせは生徒自身で行い、教員は質問を受け付ける。各教科とも数十枚をコピーして用意しているが、テスト

前には全てなくなることと少なくない。生徒が自ら学ぼうとする意欲の表れだろう。

### ●小中連携による学力向上策

## 9年間を見通した指導で 小学校段階から学力の底上げを図る

同校では青森市教育委員会の指定を受けた10年度から、校区の2つの小学校と連携事業を推進している。生徒の学力格差は小学校段階で既に始まっており、その手当てとして、小学校と連携して課題を共有し、望ましい継続のあり方を研究している。

強く意識しているのは、学習規律や生活習慣の連続性だ。11年度には中学校での学習や生活の基本を定めた「**学習の約束**」の小学校版を、12年度には中学校での話し合い活動の進め方やルールを定めた「**沖中モデル**」の小学校版を作成し、小学校の教室に掲示した。更に、小学校から培われてきた自分の課題に取り組み「**一人勉強ノート**」を中学校でも引き継ぎ、自学自習の習慣の定着を促す。

小学校の主導により、小中のつなぎ教材「**春休みの生活と学習**」も作成した。国語と算数の既習事項を確認する学校自作の問題集で、春休み中の生活記録、保護者のコメント欄も設けた。生徒は中学校入学前の春休みに取り組み、中学校に提出する。

「中学校入学までの春休みを有意義に過ごしてほしいという小学校の先生方の願いで作

成しました。解答の仕方や生活記録の書き方などから、理解度や学習姿勢を把握できるので、入学後の指導にも生かしています」（太田先生）

このように、学力格差が始まる小学校段階から学習態度や学習規律を系統的に育成し、小中接続の時期にもその連続性が途切れないように指導を工夫することで、生徒により良い学習習慣、生活習慣が定着している。

### ●生徒指導と学習指導のリンク

## 学習意欲の土台となる 生徒間、教員との人間関係を構築

同校は学習指導の充実だけで学力が向上するとは考えていない。櫻庭寿一校長は次のように指摘する。

「学力向上に何より必要なのは生徒の意欲であり、それを支えるのは集団としての生徒の団結、そして生徒と教員の信頼関係です。充実した人間関係があつてこそ学校生活に対する意欲が高まり、それが学習にも波及していくと考えます」

集団づくりの基本は生徒指導だ。あいさつを大切にし、「レベル5」（人に会ったら自分から立ち止まり、頭を下げ、相手に伝わる声であいさつできる）を目指す「**挨拶強調週間**」を設定。レベル別に自己評価させるなど、マナーや規範意識の醸成に力を入れる。また、合唱指導を重視するのも、学級の一体感や集

団づくりに欠かせない取り組みと認識しているからだ。

「学校が荒れていた時代も、生徒は学校行事には意欲的でした。元々、行事に熱心に取り組む気質をもっていたのだと思います。校内での合唱活動が活発になると、協調性と集中力が育ち、それが学習面に向かえば大きな力になると信じていました。まさに合唱の力が、生徒の学習に向かう姿勢に大きな影響を与えたのだと確信しています」（小野先生）

落ち着いた雰囲気の中で学校生活が送れるよう、廊下には授業中にもモーツァルトの曲を流している。荒れとは無縁になった今も続けており、豊かな学習環境づくりに一役買っている。

生徒と教員の距離の近さも、集団づくりを支える重要な要素だ。教員は「いつも生徒と共に」を合言葉に、登校時や休み時間、昼休みも出来るだけ教室に行き、生徒と過ごすため、職員室で教員の姿を見かけることはほとんどないという。

朝は勤務時間の1時間程前に出勤する教員が多く、7時半過ぎには、職員室から学級に担任は向かう。担任が待っているため、生徒の登校も早く、8時には落ち着いた雰囲気で朝読書が始まる。授業では開始のチャイムが鳴る前に、教科担当が教室に入り、宿題の取り組み状況をチェックする。早めに授業を始めると、生徒はさっと学習に入る。宿題





# 学力層別の補習や通知表の活用で 全ての学力層にきめ細かく対応

## 東京都立川市立立川第一中学校

立川第一中学校は、学力の向上、学習意欲の二極化の解消を目指し、2012年度から授業、補習、評価に至る幅広い改革に取り組んできた。学力層に応じたきめ細かい補習、学期ごとの振り返りの工夫により、学ぶ意欲の醸成、都平均を上回る学力向上を実現している。

### ◎課題意識

#### 下位層向けの補習は 教員個々の努力任せ

立川第一中学校では、2012年度から2年間、立川市の学力向上推進研究校の指定を受け、**授業改善、学習機会の拡充、学習意欲の向上**を柱とする改革を進めてきた。当時、同校の学習面の課題は各種調査からも明らかだった。11年度の東京都「児童・生徒の学力向上を図るための調査」では、各教科とも都の平均正答率を下回り、同校が実施した「生徒による授業評価」では、学習に前向きな集団

とそうでない集団との二極化が顕著だった。校区の小学生の学力上位層は私立校に進学する状況が続き、学力向上への期待を学校よりも塾に向ける保護者もいた。改革前後を知る主幹教諭の田野倉宏美先生はこう振り返る。「授業は中位層に焦点を当てていたのので、上位層は時間を持て余し、下位層は授業に付いていけずに意欲をなくしていました。肝心の下位層の底上げを図るための補習は、教員個々の努力に任されている状態でした」ところが、國島健二校長は12年度の赴任後すぐに生徒の潜在能力の高さを感じ取った。「集会で話を聞く態度を見て、この生徒た

### School Data

◎1947（昭和22）年に開校。2013、14年に東京都学力向上パートナーシップ事業調査研究校、14年度から立川市教育力向上推進モデル校に指定。「公立学校は地域の財産」を経営理念として生徒・保護者の満足度向上を重視する。



校長◎國島健二先生

生徒数◎399人 学級数◎14学級（うち特別支援学級3）

所在地◎〒190-0023 東京都立川市柴崎町1-3-4

TEL◎042-523-4328

URL◎<http://www1.m-net.ne.jp/dai1/>

事業成果報告会◎2015年1月27日（火）予定

ちならもつと学力を伸ばせると直感しました。生徒が力を出し切れていなかった最大の原因は、学習に向かう動機付けを学校が十分に行っていなかったことにあると思います。やれば出来るという達成感や成功体験を積みませ、学力・学習意欲の向上を図ることで本来の力を引き出せると考えました」

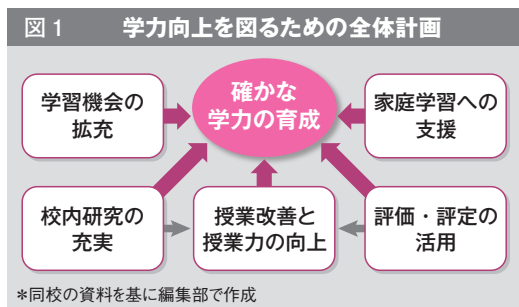
### ◎学習機会の拡充①

#### 定期考査前の集中補習で 「やれば出来る」を実感させる

改革の全体像は図1のとおり。「授業改善と授業力の向上」を中心に、「学習機会の拡充」



# 広がる学力格差への多様な取り組み



「最大のねらいは、勉強の成果を実感して学習意欲を高めることです。国語

「家庭学習への支援」「評価・評定の活用」「校内研究の充実」と、あらゆる学習場面を通して生徒の潜在能力を引き出していくものだ。最大の特徴は、学力層に応じたきめ細かい指導にある。対象とする学力層を明確にし、それぞれの現状の学力・学習意欲を見極めた上で、自立的な学びへ導くために最適な指導方法・形態を考えていく。その軸となるのは、定期考査前に行う「**ステップアップ教室**」だ。「復習授業」「自主学習」の2コースに分け、基礎学力の定着を目指す補習である。中位層の中の下位の生徒を対象にした「**復習授業コース**」は、定期考査前の1週間、放課後の1コマで行う。国数英理社の5教科で、日頃のテストの結果を基に各教科20人前後の生徒を指名し、1日1教科を日替わりで実施する。内容は試験範囲のダイジェストを基本とし、どの教科も短期の学習で結果が出やすい内容に特化している。国語科の茨裕美先生は次のように話す。

では、読解力のように継続的な学習が必要な分野は難しいので、文法や古典など、取り組みれば成果が出やすい内容に重点を置き、「出来た」という達成感を味わわせることを意識しています」

「**自主学習コース**」は、復習授業コースの授業にも付いてこれられないような最下位層と、自分で課題を見付けられる中・上位層が対象だ。生徒自身が決めた教材で学習を進め、必要に応じて教員が質問に答える。2人の教員が監督を担当するが、実際には他に大半の教員が個別指導に加わる。

復習授業コースで成果が出たことで、次回の参加を希望する生徒も多い。そうした生徒には、補習で使うプリントを渡して「分からなかったら質問に来なさい」と、自主学習コースへの参加を促す。14年6月のステップアップ教室の参加率は1年生88%、2年生85%、3年生77%と、最上位層を除いてほぼ全員が参加しているのも、生徒の満足度の表れだ。「やれば出来る」という成功体験、「皆が頑張っているから自分も頑張ろう」という連帯感が、自ら学びに向かう意欲を高めている。

## ●学習機会の拡充②

### 最下位層向けの補習や生徒全員が受ける夏季補習も好評

12月に行う「ビルドアップ教室」は、1・2年生の最下位層を対象とした個別補習だ。



立川市立立川第一中学校 校長  
**國島健一** くにしま・けんじ  
「公立学校は地域の財産」をモットーに、生徒・保護者の満足度、地域の信頼度を高める教育を展開したい」



立川市立立川第一中学校  
**田野倉宏美** たのくら・ひろみ  
主幹教諭。副校長補佐、生活指導主任。「二つひとつの仕事を手堅く務め、校長と先生方をつないでいきたい」



立川市立立川第一中学校  
**多田春美** ただ・はるみ  
主幹教諭。教務主任。学力向上推進担当。「自分にも生徒にも厳しく。間違っていることは躊躇せず叱る」



立川市立立川第一中学校  
**荒井英樹** あらい・ひでき  
主幹教諭。学習進路指導主任。研究主任。「生徒が1つでも分かったと感じる授業を目指す」



立川市立立川第一中学校  
**茨裕美** いばら・ひろみ  
主幹教諭。学力向上推進副担当。「生徒と積極的にかかわり、たくさん声を掛け、会話することを大切にしている」

三者面談期間の5日間、放課後に105分間、期間中の課題として配布される自宅学習用プリントを使い、副担当が生徒個別に自学の手助けをする。13年度1年生の2学期末考査では、この補習を受けた生徒全員が、数学・英語で中間考査の結果を大幅に上回った。それに手応えを感じ、以降の補習にも積極的に出席する生徒が増えている。

これを受けて、14年度は最下位層への継続的な指導を行うため、数学・英語の成績不振者を対象とした月2回の「水曜学習教室」も始めた。このように、効果のあった取り組みはすぐに拡充・定着させていくフットワークの軽さが、生徒の学力向上を支えている。

上位層から下位層まで全生徒を対象とする補習が「サマースクール」だ。夏季休業前の6日間、ほぼ全教科で選択制の99講座を設ける。国数英は、小学校段階の学習内容の復習から、高校受験に必要な発展的な内容まで、幅広く網羅する。同校の全教員が指導に当たるほか、小学校の復習は小学校教員、発展的な内容は塾講師にも指導に入ってもらう。もちろん、受講費は無料だ。生徒は、各学年30前後の講座の中から選ぶことも楽しんでいうで、13年度は前年に比べて、全学年で生徒が参加するコマ数が増えた。ここにも、学校の求心力が高まっている様子がうかがえる。

### ● 教員の負担を減らす工夫

## 外部人材の活用と教育課程の工夫で 全校体制の指導を実現

指導内容の工夫と共に、教員の負担感を減らし、指導や校務に当たる時間を増やすことも、取り組みの成否のポイントとなる。

その1つが**外部人材の活用**だ。サマースクールでは、小学校や塾と連携して講師を派遣してもらう。水曜学習教室や定期考査前に

実施する土曜学習教室では、他校の非常勤講師や大学生を学習支援員として招いている。國島校長を始め、教員の人脈を活用して人材の確保に努めた。

もう1つのポイントは、**教育課程の工夫**だ。例えば、ステップアップ教室は、13年度までは6時間目の後に実施していたため、教員だけでなく、生徒の負担も大きかった。そこで14年度は、6時間目をなくし、補習の時間に充てることにより、**教員全員が指導**できるようになり、参加率も大幅に高くなった。なお、削減した授業時間分は、土曜日と、夏季休業期間を短縮して補充している。

サマースクールの日程も工夫した。同校の夏季休業は7月25日～8月26日。以前は夏季休業直後と終了直前の各3日間で、サマースクールを行っていた。14年度は、夏季休業直前の6日間に集中させ、午前中は通常授業、午後にサマースクールを設定した。この日程変更は、時間割の作成や講師の確保にも良い影響をもたらしていると、主幹教諭の多田春美先生は指摘する。

「夏季休業中に補習を実施すると、教員の希望日時を集約するのが大変で、かつ塾の夏季講習とも重なるため外部講師の確保が容易ではありませんでした。夏季休業前にまとめて行うことで、それらの問題が解決できる上、外部講師が指導に当たる時間帯には、教員は校務に専念できるようになりました。後半の

3日間は通常の学校が夏休みに入っているため、その期間に小学校教員を招くことが出来るのもメリットです」

サマースクールの参加率は、前年比で、3年生38%↓51%、2年生43%↓73%に増えているのも、こうした日程上の工夫によるところが大きい。

### ● 評価・評定の活用

## 終業式3日前に通知表を渡し すぐに反省と目標を考えさせる

学力層の拡大への対応では、教員が補習や家庭学習を手厚く指導するだけでなく、生徒自身が学習上の課題を把握し、自ら解決していく姿勢を養うことも大切だ。同校では、そうした生徒の課題発見・解決力の向上をねらった評価・評定の活用にも力を入れる。

課題発見のために欠かせない手法が、各教科で作成している**シラバス**だ。同校ならではの特徴は、各単元の指導目標や評価の観点に加え、ノートや小テストなどの評価材料、観点ごとの割合を示している点にある。各学期の冒頭に配布し、各教科が何を生徒に求めているのかを、最初の授業で詳しく解説する。研究主任の荒井英樹先生は次のように話す。

「詳細なシラバスの作成は大変ですが、立川市教育委員会に提出が義務付けられている年間指導計画の書式を同じ形にすることで、負担軽減を図りました。いったん作成すれば、

# 広がる学力格差への多様な取り組み

図3 「振り返りシート」



評価方法を「評価説明資料」から選び、頑張れたことは○、頑張れなかったことは×として、次の目標を書かせる  
\* 同校の資料を基に編集部で作成

\* 2点共、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイトにて拡大してご覧いただけます。http://berd.benesse.jp > 教育情報 > 中学校向け

図2 「評価説明資料」1学年国語の例

学習内容	観点	評価材料	評定に用いる割合
4 いにしえの心に残る 漢文や詩に由来する言葉 文法「だ・れ・何・を・どうするぞ」	【聞く・話す・書く】	口頭発表(授業ノート、漢字ノート、ワーク)	10%
		ワークシートへの記入 口頭発表への録音録画(授業録画、録音) 口小テスト(漢文)への録音録画 *録音への録音録画	2%
5 読みとらえる 役割「読みとらえあひの暮らし」 漢字「漢字の音読み」	【読む・聞く】読力	口頭発表ワークシート 口頭発表への録音録画(授業録画、録音) *スピーチ	10%
		漢字ワークシート 漢字ワークシートへの録音録画(授業録画、録音) *スピーチ	2%
6 漢字を見つめる 示語「少明の日の思い出」 文法「全の類のまで」 漢字「漢字の読み方」	【書く】読力	口頭発表 口頭発表ノート、ワークシート 口小テスト *録音	10%
		口頭発表 口頭発表ノート、ワークシート 口小テスト *録音	2%
漢字(漢字・音読み)	【読む】読力	口頭発表 口頭発表ノート、ワークシート 口小テスト *録音	10%
		口頭発表 口頭発表ノート、ワークシート 口小テスト *録音	2%
漢字(漢字・音読み)	【読む】読力	口頭発表 口頭発表ノート、ワークシート 口小テスト *録音	10%
		口頭発表 口頭発表ノート、ワークシート 口小テスト *録音	2%
漢字(漢字・音読み)	【読む】読力	口頭発表 口頭発表ノート、ワークシート 口小テスト *録音	10%
		口頭発表 口頭発表ノート、ワークシート 口小テスト *録音	2%

学期冒頭で配布したものに、評価材料ごとの割合を加えたり、評価材料に用いなかった項目を二重線で示したりしている  
\* 同校の資料をそのまま掲載

後は日々の授業の様子から、若干の修正を加えるだけなので大きな負担にはなりません」  
学期末には、シラバスの評価方法欄に「授業観察2%」「ワークシート5%」など、更

改革の成果は学力向上の形で明確に表れている。東京都「児童・生徒の学力向上を図るための調査」は改革2年目で都の平均正答率を超え、国語、数学、英語の3教科は知識・技能、思考・判断・表現のいずれも大きく向上した。「生徒による授業評価」から読み取れる学習意欲も、13年度は前年比で国語49% ↓77%、英語46% ↓78%と改善し、補充教室の参加率も大幅に向上した。14年度に立川市の全公立中学校で外部人材登用のための特別

## ● 成果と課題 継続的な人材確保と 小中連携が今後の課題

に詳細な割合を加えた「評価説明資料」(図2)を作成し、終業式の3日前に通知表(学習の記録)と共に配布する。生徒はこれらを見ながら、「振り返りシート」(図3)に各教科の反省、次の学期に向けた目標などを記入し、終業式までに担任に提出する。担任はそれを全てチェックし、反省すべき点に気付いていない生徒、適切な目標設定が出来ていない生徒に対しては個別に、「ノートが提出できていなかったからCではないかな」などとアドバイスする。友だち同士でシートを見せ合い、なぜ評価が低いのかを分析する姿も見られるという。評価方法の開示と振り返りが、課題の発見と解決方法を考えるきっかけになっているのである。

予算が計上されたのも、同校の取り組みの影響が大きいという。校区の小学校から同校に進学する上位層も確実に増えている。

一方、課題もある。1つは継続的な人材確保だ。「現在は研究指定を受けているため資金は潤沢ですが、この状態が続くとは限りません。ボランティアを公募するなど、今以上に外部人材の確保に工夫を凝らす必要があります」と多田先生は強調する。もう1つは、13、14年度に指定を受けた東京都の「学力向上パートナーシップ事業」に基づき小中連携を深化させることだ。

「小中連携を一過性のもので終わらせず、学力向上につながる取り組みに発展させていくことで、本校も更にステップアップしていくと期待しています」(國島校長)

## 國島校長が考える 学力二極化への対応

学力や意欲の二極化を始め、現在の学校課題に対応するためには、教務・生活・進路という従来型の組織では限界があります。本校では、主幹教諭を「学力向上」「評価」など分野ごとの特命担当に任命し、企画立案から実践まで任せています。その前提として、担当授業時数を軽減するなど、十分に能力を発揮してもらうための環境整備も行っています。先生方に活躍の場を与え、次世代のリーダーを育てることが、持続性のある学校運営に欠かせないと思います。



# 志を高め、上位層がけん引する 学校づくりで、全体を底上げ

## 福岡県 朝倉市立十文字中学校

十文字中学校では、大学キャンパス訪問や検定取得者の表彰などにより高い志を育み、学習意欲を引き出す指導を重視している。向上心の高い学力上位層の意識に働き掛け、けん引役とすることで、学校全体の学力の底上げを図り、県平均を大きく上回る学力向上を実現した。

### ◎ 取り組みのねらい

**志を高める指導によって  
「自分でする勉強へ」**

十文字中学校は、1学年約50人の小規模校だ。過疎化が進む農村地域に位置し、地域の子どもの数は減少傾向にあるため、毎年全世界帯が一律500円の寄付金を同校に寄せるなど、同校に対し、住民は期待を寄せている。

そうした中、同校では2010年度に赴任した佐々木隆良校長の主導の下、独自の学力向上策に取り組んでいる（\*）。その柱は「経営システムの構築」と「ディスカバー十

字構想」だ（図1）。経営システムの構築は、

教育活動の改善が中心となる。一方、**ディスカバー十文字構想**では、教育課程外の活動による学力向上、志の涵養、地域への愛着や誇りを育む活動が中心となる。自校の良さを発見すると同時に、自分自身を見つめ直し、再発見してほしいという思いが、その名前に込められていると、井手眞理教頭は説明する。

「志を高めない限り生徒は心の底から勉強を頑張ろうと思いません。内発的動機付けが生まれることによって勉強の質が変わり『他人にさせられる勉強』から『自分でする勉強』へと変わっていくのです」

図1 取り組みの全体像

### 高い志を持ち、たくましく生きる生徒の育成

#### ディスカバー十文字構想

- **文中寺子屋塾**
  - 夏講座・冬講座
  - プリリアントスチューデント表彰
  - 文中式ノート検定 ほか
- **文中未来塾**
  - この人に学ぶ
  - 大学キャンパス訪問
  - 十文字しぐさ検定 ほか
- **ぶんぶんコミュニティー**
  - 加勢しちやる隊の取り組み
  - 英彦山遠行会 ほか

#### 経営システムの構築

- **授業改善システム**
  - 1人年間2回の研究授業
  - 模擬授業→研究授業→授業整理会
  - ルーブリックの活用 ほか
- **組織マネジメント**
  - SWOT分析の活用
  - 経営ビジョンの共有 ほか
- **地域連携**
  - 学校評議員
  - マイスクール委員会 ほか

信頼される学校

\*同校の資料を基に編集部で作成

\*十文字中学校の取り組みは、本誌2012年Vol.1の特集でも紹介しています。併せてご覧ください。バックナンバーはベネッセ教育総合研究所のウェブサイトをご覧ください。http://berd.benesse.jp > 教育情報 > 中学校向け

### School Data

◎ 1977（昭和52）年に開校。2012年度から福岡県の「基礎基本の知識及び技能の定着を図る学校の組織的取組」の指定を受けて、「確かな学力」と「豊かな心」の育成のための改革に取り組む。



校長◎佐々木隆良先生

生徒数◎ 157人 学級数◎ 7学級（うち特別支援学級1）

所在地◎〒838-0023 福岡県朝倉市三奈木 3710

TEL◎ 0946-22-3106

URL◎ <http://www.asakura-fko.ed.jp/jumonjichu/>

研究発表会◎ 2014年11月27日（木）予定



# 広がる学力格差への多様な取り組み

●志を内発的に高める

## 難関大のキャンパス訪問で「上を目指す意識」を育む

向上心のある学力上位層の意識を更に高めることで、学年・学級全体の雰囲気を引き締まり、中・下位層が引張られて学力の底上げを図れるというのが、同校の考えだ。ディスカバー十文字構想のねらいは、その土台となる生徒同士が高め合う環境をつくる点にある。進路意識の向上に最も成果を上げているのが、「**大学キャンパス訪問**」(写真1)。2年生12月に行う修学旅行の行き先をあえて東京にし、同校卒業生や朝倉市出身の先輩が通う難関大を訪れる。先輩たちから大学生活や、将来の夢とそのための努力、中学・高校時代の自分について聞くためだ。



写真1 大学キャンパス訪問は、大学主導ではなく、生徒が自由に見て回る。道行く大学生に突撃インタビューをすることもある

13年度は、東京大や東京外国語大、早稲田大などに、1人2校ずつ訪問して先輩の話を聞き、大学の施設や授業を見学した。「中

学時代は内気だったけれど、得意科目を頑張りがり続けたことが自信になった」「友だちから「上を目指す意識」を育む

「上位層は最先端の研究に触発され、中位層はもっと上を目指して頑張ろうという意識が芽生えてきます。下位層も、大学がどういうところかを知り、大学進学を見据えて、志望の高校を変更する生徒もいます」

2年生全員が訪れるため、訪問先が同校卒業生だけでは足りず、佐々木校長の前任校の卒業生や教員の知人にも当たって協力者を募る。同校出身ではなくても、地元の後輩のためなら、快く引き受けてくれる朝倉市出身の学生は少なくない。

実施時の重要なポイントは、事前の準備や調べ学習の徹底にあると、城戸先生は話す。「単なる見学に終わらせないためには、事前指導をしっかり行うことが大切です。訪問先の大学や学部の情報を調べるのはもちろん、学生への質問項目を考えさせ、教員が全て確認します。漠然とした質問には、より焦点化するようアドバイスします」

キャンパス見学時には、大学の構内にはどのような掲示物が貼ってあるのか、授業の合



朝倉市立十文字中学校 校長  
**佐々木隆良** ささき・たかよし  
「学校の使命を果たすために、巻き込み、巻き込まれる関係が出来るシステムを構築したい」



朝倉市立十文字中学校 教頭  
**井手眞理** いで・まり  
「我が子を通わせたいと思えるような学校づくりを心掛けていきたい」



朝倉市立十文字中学校  
**田中誠** たなか・まこと  
主幹教諭。「子どもたちが夢をかえなくていけないような環境づくりに力を入れていきたい」



朝倉市立十文字中学校  
**城戸学吏** きと・がくり  
研究主任。「高校受験後を見通して、自分がなりたい、したいことは何かを考えられる生徒を育てたい」

間や学食で学生たちはどういう会話をしているのかといったところにも着目させている。

## 未知の人生に立ち向かう勇氣や希望を与える社会人の講話

「この人に学ぶ」は、さまざまな業界の第一線で活躍する社会人を招き、仕事の内容や働く意義などを聞く講演会だ。毎年5月、弁護士や税理士、企業経営者、新聞記者、陶芸家、パティシエなど専門性の高い職種を中心に10人ほどを招き、全学年の生徒が縦割り2人の講話を選んで聞く。講師は、同校の教員が

人脈をたどり、時にはインターネットで探す。

「以前、ある生徒が講演会の感想で『勉強しなくてもよいと思った』と書いていたのを見て、講師には必ず、その職業に就くまでに努力した道のりを語ってもらっています。どんな職業でも苦労はあります。それが専門性の高い職業ならなおさらです。自分では就けないと今思っているような職業でも、努力次第で道が開けるかもしれない、自分にも出来るかもしれないという希望や勇気を、生徒たちに持ってほしいのです」(佐々木校長)

あるパティシエは「学校に通う2000人のうち、パティシエになれるのは2、3人」海外では語学だけでなく日本文化への理解も大切」と熱く語った。社会で求められる力は何かを職業人からじかに聞くことで、今の学習が将来にどうつながるのか、生徒はおぼろげながらも感じ取り、学ぶ意味を自覚していく。

### ● 志を外発的に高める

## 普段話さない校長からの叱咤激励で より高い志望を目指す

志を高めるための手段として、管理職と生徒との対話も重視している。その1つが、3年生の夏休み前に行う校長面談だ。担任による1学期の進路面談が終わると、志望校を記した生徒の個人カルテを基に、佐々木校長が3年生全員と一人ひとり面談をする。ねらいは、生徒の志望校を1ランク上げることだ。

志望実現のためにどういふ努力をしているのか、何時間学習しているのかという話を聞きながら、「君の力ならもっと伸びる」「最後まで諦めるな」と励ます。

合格ラインぎりぎりの生徒には「このまま頑張れば大丈夫」と伝え、安易に志望を下げさせないようにしている。

「1つ上の目標を提示することで、生徒の

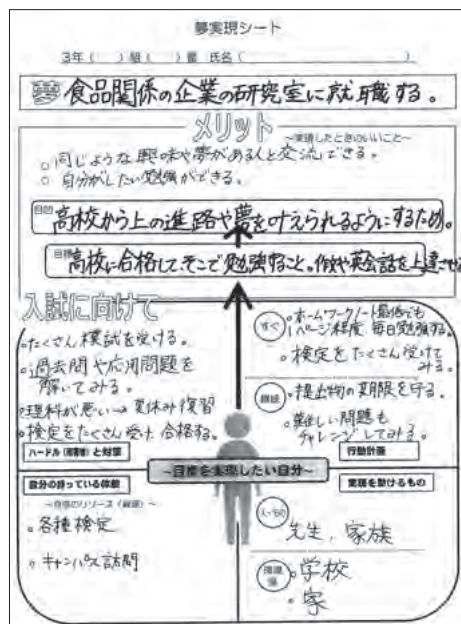
見えていた世界が変わり、学習の仕方そのものが変わること期待しています。普段接する機会の少ない校長が直接励ますことで、自分を見てくれているという安心感につながり、意欲も湧くと思うのです」(佐々木校長)

毎年1学期に全校で実施する「十文字しく

さ検定」も、管理職が直接生徒の志を刺激する場だ。管理職や主幹教諭と面接をし、社会人として必要なマナーや、望ましい言葉遣いなどをチェックする検定である。1年生は初級、2年生は中級、3年生は上級と位置付け、それぞれABCの3段階で評価し、Cの生徒にはB評価になるまで追試を行う。

検定では、服装や言葉遣いのチェックは最低限にとどめ、面接の中身を重視する。「ス

図2 「夢実現シート」



将来の夢や目的、それを実現するために必要なこと、自分を変えた体験などを記入するシートで、進路行事などがある度に年数回書き換えさせる。1年生は漫然と書いている生徒が多いが、2年生の大学キャンパス訪問を契機に、よりレベルの高い高校を志望校にする生徒、「自分の持っている体験(自信のリソース)」の欄に大学訪問を挙げる生徒など、明確な志望を持ち始める生徒が多い

\*同校の資料をそのまま掲載

ローガンにある目指す文中生の姿を3つ言ってくください」「夢や目標は何ですか」「そのために何を頑張っていますか」というように、十文字中生としての心構え、夢の実現に向けての努力を言葉にさせることによって、コミュニケーション能力の向上も図る。

校長や教頭が面接官となるので、生徒だけでなく、傍らで見ている担任も緊張する。井手教頭は、「検定が近くなると、どの学級も担任が中心となって猛特訓をします。担任にとつては、生徒の姿を通して学級運営の質が問われるため、かなりのプレッシャーを感じているようです」と述べる。マナー検定を通して教員の指導力も磨かれていくのだ。

## 検定取得者の表彰制度により 切磋琢磨する集団づくり

教育課程外での学力向上策で特に成果を上



## 広がる学力格差への多様な取り組み



**写真2** 英語検定、数学検定、漢字検定、歴史能力検定、ICTプロフィシエンシー検定試験（P検）などを、5級で1ポイント、4級で2ポイントなどと換算し、10ポイント以上を獲得した生徒は、名前と顔写真が、合格した検定と共に掲示される

げているのが、「**検定取得者の表彰制度**」だ。各種検定を級ごとにポイント化し、10ポイント以上を獲得した生徒を「ブリリアントスチューデント」として表彰する（写真2）。

「本校のような小規模校では競争が生まれにくいので、絶えず刺激を与えることが重要です。上位層の中には、学校の学習だけでは物足りなさを感じる生徒もいます。そうした生徒の才能を開花させるためにも、全国と競える検定を利用しています」（井手教頭）

中には、1人で4つ、5つもの検定を受ける強者もいる。数だけではなく、高校・大学入試の推薦基準としても通用する準2級・2級などを取得する生徒もいる。頑張っただけの成果が形として表れるところに、生徒はやりがいを感じているという。

最大の効果は、中・下位層の生徒の間に競争意識が生まれることだ。偏差値65前後の集団が資格を取り始めると、必ず60前後の集団

が引っ張られて、学年全体が頑張ろうという空気に包まれるという。主幹教諭の田中誠先生は「検定に向けて友だちが学ぶ姿を見て、中・下位層の生徒の中にも『自分も頑張らなければ』という気持ちが芽生えるようです。難易度の低い級から1つずつステップアップできるところが、中・下位層の生徒にも取り組みやすい要因になっていると思います」と分析する。

### 理想の十文字生をたたえる 「文中寺子屋塾大賞」

学校生活のあらゆる面で優秀な生徒には、学年末に「文中寺子屋塾大賞」が贈られる。基準は「品行方正で勉学に励み、十文字中生のモデルとしてふさわしい人物」だ。成績が上位であることはもちろん、検定取得でも実績を挙げ、あいさつや掃除もきちんと出来、学校や友だちのために率先して行動できる。そうした総合的に優秀な生徒を佐々木校長が1、2名選出し、卒業式前日のリハーサル時に全校生徒の前で表彰する。

生徒たちも意識しており、毎年卒業式が近くなると「今年は誰か」という話題で持ち切りになる。次点には「文中未来塾大賞」が用意され、こちらも成績や生活態度など多様な面を評価して毎年5、6名を選出する。「優秀者は全校生徒の前で褒めたたえ、競争意識を刺激するのがねらい」と佐々木校長は述べる。

### ● 成果

### 学年を追うごとに 確実に伸びていく生徒の学力

取り組みの成果は、学力に確実に表れている。14年4月の福岡県学力分析テストでは、県平均との差が、1年生と2年生では10点上、3年生は40点以上上回った。また、外部テストでは、3年生の数学で1年生から学年を追うごとに得点が伸びていた。

「本校のような小規模校でも、他校にはない質の高い取り組みを継続していけば、必ず生徒の学力は伸びるのです。先生方や外部の人材を巻き込みながら教育を展開し、今後も地域の期待に応えられる成果を上げ続けていきたいと考えています」（佐々木校長）



### 佐々木校長が考える 学力二極化への対応

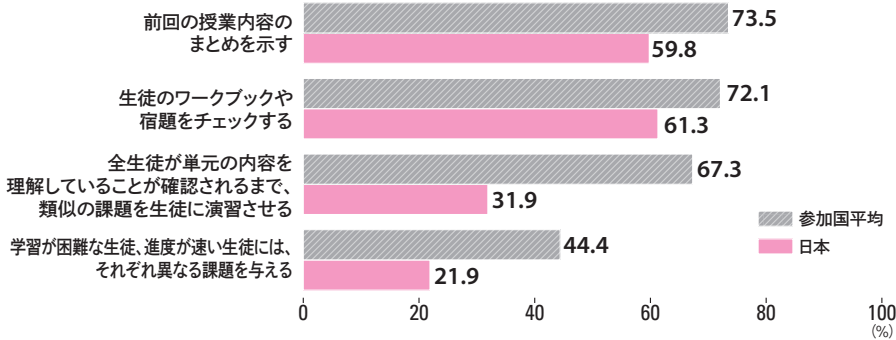
学力向上の取り組みで大切なのは、一次関数式の  $y = ax + b$  でいう、係数  $a$  の数値をいかに上げていくか。入学時の学力（ $=b$ ）がそれほど高なくても、 $a$  の数値を数倍に高めることで必ず追い付くと信じています。それと共に大切にしているのが、先生方の主体的な参画です。本校では、週1回、先生方に学級経営や学習指導の取り組みのあり方を点検する「学年・学級バリアフリー」の時間を設けています。双方向の対話により学校全体を活性化させたいと常に考えています。

# 全国の学校が挑戦する多様な取り組み

日本の学力格差への取り組みは、諸外国と比較してどのような状況か。全国の先生方が学力格差に有効と考えている手立ては何か。調査結果から明らかにすると共に、本特集の取材の過程で全国の中学校にヒアリングを行った中から、特徴的な取り組みを紹介する。

図1 諸外国に比べて、生徒の理解度に応じた取り組みが少ない

Q. 年度を通じて、対象学級において、以下のことをどのくらいの頻度で行いますか。

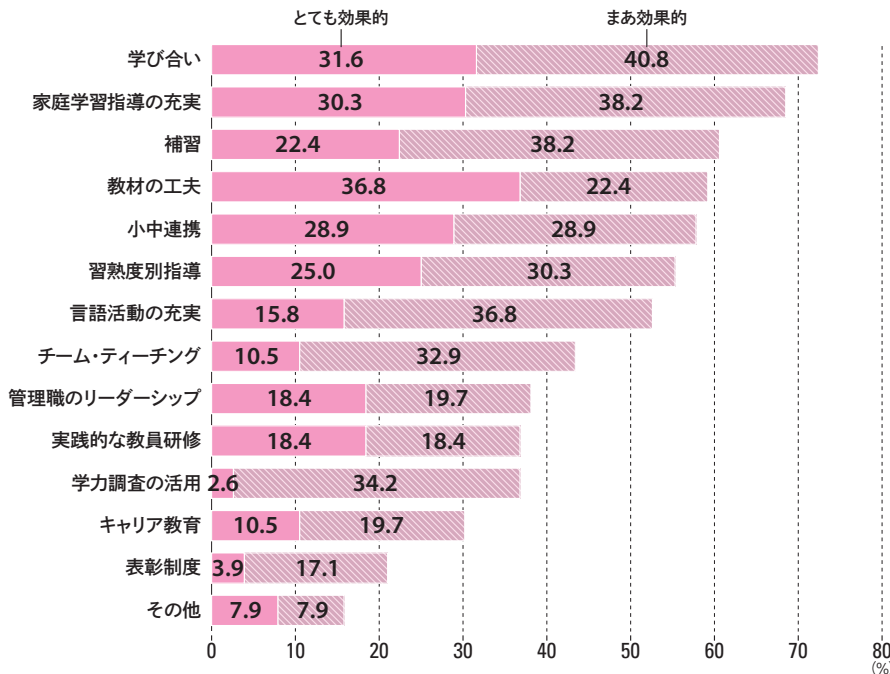


注) 4段階のうち「ほとんどいつも」「しばしば」と回答した割合の合計値  
出典/ OECD国際教員指導環境調査(2013年2~3月実施。34カ国・地域が参加。日本は192校、3,484人が回答)

指導方法を国際比較した調査結果を見ると、日本は諸外国に比べ、生徒の理解度に応じた取り組みの頻度が低いことが分かった。同調査では、「支援職員の不足」も、参加国平均 46.9%に比べて、日本は 72.4%と大きく差が付いた。このような厳しい条件下にあって、生徒の学力に応じた個別指導をいかに行っていくかが、課題といえるだろう。

図2 学力の二極化に有効な取り組みは「学び合い」「家庭学習指導」「補習」

Q. 「学力の二極化・多極化対策」として効果があると思われる施策はどれですか。



注) 14施策の中から「とても効果的」「まあ効果的」と思われるものを全て選択  
出典/「VIEW21中学版」読者モニターアンケート(2014年6月実施。回答者数76人)

小誌読者モニターの先生方に、学力の二極化・多極化対策として効果があると思われる施策を聞いたところ、トップは「学び合い」で、「家庭学習指導の充実」「補習」と続いた。補習は、立川市立立川第一中学校の記事でも紹介したが、いずれも幅広い学力層に応じた指導が可能であり、多くの学校が取り入れている。「教材の工夫」「小中連携」「習熟度別指導」「言語活動の充実」も、半数以上の先生から支持されている。



# 広がる学力格差への多様な取り組み

図3 広がる学力格差に対するさまざまな実践事例

施策	実践内容（ねらい）
学び合い	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎自分の考えを書いたものをペアで共有した後、机間指導でチェックしておいた生徒を意図的に指名して、学級全体に広げ、焦点化することで、多様な考えに気付かせるようにしている。自分の考えを書けない生徒もペアの生徒から気付きや発見を得られるため、学びのきっかけになっている。活動を継続するうちに書くことに抵抗感が薄れ、結果として落ち着きが生まれたため、成績も向上した。[宮城県／D中学校]</li> <li>◎「教えるのはムダ」と言う生徒がいたが、教員がきちんと褒めると共に、教えることの意味（教えることは難しいが理解が深まることや、説明できてはじめて本物の学力であることなど）を伝え、教えてもらった生徒にも感謝の言葉を伝えるように指導したところ、自ら他の生徒にも教えるようになった。[岩手県／I中学校]</li> </ul>
家庭学習指導の充実	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎授業で解説を聞いている時は理解できたつもりでも、家庭では解けない生徒がいる。1人で勉強する方法をいかに授業で伝えるかが大事。単なる解説ではなく、「この時、既習事項のここを使う」と具体的に示したり、「ここでは何を伝えればいいかな？」と考えさせたりすることで、1人で解く時も出来るようにした。[青森県／T中学校]</li> </ul>
補習	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎毎週月曜日は「ノ一部活デー」にして、国数英を軸に、教員全員で放課後補習を実施。実技教科担当教員にも国数英を指導してもらうので、生徒4～5人につき教員1人と少数指導が出来、参加する生徒の目も輝いている。[佐賀県／M中学校]</li> </ul>
教材の工夫	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎授業で使うワークシートを「100字で」「150字で」「2段落で200字で」など、学力層別に3種類作成。どれを選ぶのかは生徒に任せると、各自それぞれに合ったものを選び、授業での達成感が高まった。下位層にも「押し付けられた」という意識をもたせないようにすることがポイントだと感じている。[青森県／T中学校]</li> <li>◎単元が終わると実施する「確認プリント」は、1枚のプリントの中に「基礎」から「応用」まで段階別に問題を作成することで、どの生徒も必ず解けるため、積極的に学習に取り組むことが出来た。[愛媛県／H中学校]</li> </ul>
小中連携	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎小学校の算数加配教員に週3回、出前授業でTTに入ってもらっているが、小学校時代に算数が苦手だった生徒を把握しているので助かる。1・2年生向けの夏季補習でも、5日間で延べ30人ほどの小学校教員が出前授業。小学校の内容からフォローしてくれ、小学校に戻ってから自分の授業にも生かしている。[山口県／K中学校]</li> <li>◎中学1年生の3月に、小学6年生との合同授業で、1年間の英語で習ったことを発表させている。中学1年生は発表準備の過程で、理解できていなかったところを補えるため集大成になる。小学6年生は1年後のゴール（目標）が明確になる。その他、教員が小学校の授業見学や研究会などに行きやすいように、必要に応じて時間割を組み替え、自習にならないようにしている。[宮崎県／M中学校]</li> </ul>
習熟度別授業	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎数学で学力格差が大きいため、1年生後半からテストの結果に応じて、2学級を4つの習熟度別クラスに再編している。2年生は生徒の希望も取るが、ある程度は意図的にクラスを分ける。3年生は完全に習熟度別だ。単元によってもクラス替えをした結果、低学力層の底上げが出来た。下位層の生徒も、少人数指導で「やれば出来る」と思えたら、向上心が芽生える。[東京都／F中学校]</li> </ul>
ユニバーサルデザイン	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎ユニバーサルデザインは得意不得意による格差も補える。授業の導入時に50分間の流れを示すことで、落ち着いて授業に臨んだり、重要箇所は色や記号を全教科で統一すると、学力下位層の生徒にとってもポイントが分かりやすくなった。[佐賀県／M中学校]</li> </ul>
ICTの活用	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎社会科の単元導入時に、教室設置のプロジェクターで単元のDVD（3分間程度）を見せると、学力下位層の生徒にも興味を視覚的に喚起できる。教科書に載っていない映像や、鉄砲の大きな音など、シンプルなほうが効果が高い。[東京都／O中学校]</li> <li>◎教室設置の電子黒板に、デジタル教科書を投影しながら授業すると、「〇ページを開いて」と言ってすぐに開けないような生徒でも授業についてこられる。顔を上げて説明を聞くことになるので、生徒の理解度も把握しやすい。また、グラフの変化は動的に見せられるので、理解が深まり授業に参加するようになる。[佐賀県／M中学校]</li> </ul>
保護者連携	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎通知表は終業式に生徒へ渡すのではなく、長期休業前の3日間、三者面談期間を設け、教科担当からのコメントと共に1人ずつ保護者へ手渡している。長期休業中の学習計画や、次学期の目標につなげている。[三重県／K中学校]</li> <li>◎「半日学校見学日」を設定。保護者に、授業中だけでなく、休み時間や掃除時間も含め、学校生活の実態をじっくり見てもらう。その中で、提出物の忘れ物や居眠りなど、家庭生活（学習環境や就寝時間など）と結び付けて要因を解説していくと、協力を得やすくなる。[滋賀県／O中学校]</li> </ul>

# 「知識の習得」から「意味理解」へ 「学習の本質」の捉え直しが、学力底上げの鍵

本特集では、学校現場の実践事例と各種データを基に、広がる学力格差の実態と課題解決の方策を探ってきた。それを受けて本稿では、教育心理学・教育方法を専門とする上智大の奈須正裕教授とベネッセ教育総合研究所初等中等教育研究室長の木村治生に、事例校の取り組みの総括と学力の二極化の解消に向けた展望について語ってもらった。

## 今の教員は全ての生徒に責任を持つととる気概が高い

**木村** PISAの調査によると、日本は家庭環境による子どもの学力格差が諸外国に比べて小さく、国際的に見ると、学校教育が平等化を実現しているといっていると思います。一方で、現場の先生方には、学力格差への対応が難しくなっているという感覚があるのも事実です。中学校の先生に話をうかがうと、「家では勉強できない」「塾に行けない」など家庭による違いがある中で、学校がどこまで出来るかを真剣に考えている先生が多く、その点は非常に心強く感じています。

**奈須** 文部科学省の「全国学力・学習状況調

査」の結果を見ても、学力の分散は縮まっているという印象があります。二極化が課題になっているとすれば、それはむしろ先生方の意識が高まっている証拠ではないでしょうか。特別支援教育の充実に代表されるように、「どのような生徒であっても、自分たちが責任を持って指導する」「社会的公正を実現するために、全ての生徒の発達を保障しなければならぬ」という気概が高まっているのは、素晴らしいことだと思います。

## 管理職のリーダーシップと生徒の視点に立った取り組みが秀逸

**木村** 今回紹介した学校事例では、各校の特色がよく表れていました。自校の課題や特徴

を正確に捉え、自分たちが使える教育リソースを最大限活用し、解決に向けて果敢に挑戦されている姿が印象的でした。

**奈須** 3つの事例校は、これまでの定型的なノウハウにとらわれず、斬新なアイデアをどんどん出して、「まずはやってみよう」という前向きな姿勢が見られました。特に、校長先生がリーダーシップを発揮して独自性を打ち出し、先生方はそれを受けとめて自由闊達に議論をするという雰囲気、どの学校にもあったように思います。

何よりも重要なのは、生徒の視点に立った取り組みになっている点です。朝倉市立十文字中学校が行う大学キャンパス訪問（P.15参照）のように、近くに大学がなく、将来の

# 広がる学力格差への多様な取り組み

上智大 総合人間科学部教育学科 教授  
**奈須正裕**

なす・まさひろ◎東京大大学院教育学研究科教育心理学専攻博士課程修了。博士(教育学)。専門分野は教育方法学、教育心理学、カリキュラム論。主な著書に『子どもと創る授業』(ぎょうせい)、『知識基盤社会を生き抜く子どもを育てる』(ぎょうせい)などがある。



ベネッセ教育総合研究所  
初等中等教育研究室長

**木村治生**

きむら・はるお◎初等・中等教育領域を中心に子ども、保護者、教員を対象とした意識や実態の調査研究、教育市場(産業)の調査などを担当。文部科学省や経済産業省、総務省から委託を受けた調査研究にも数多く携わる。現在、東京大客員准教授を兼任。

イメージが湧きにくい生徒たちに、大学生の姿を見せて志を持たせるといふ発想は、学習させて学力を高めようという従来の学力観にとらわれていたのでは、生まれなかったのではないのでしょうか。立川市立立川第一中学校でも、生徒が補習に参加しやすいように、時期や時間割を工夫するなど、生徒側の視点に立って補習を企画しています(P.11参照)。限られたリソースをどのように配分して最適化を図るのかという、良い意味で民間企業的な発想が表れていました。

**木村** 立川第一中学校が行っている、通知表を終業式の3日前に渡すという取り組みも印象的ですね(P.12参照)。「全国学力・学習状況調査」の結果を見ると、自分で計画を立てて学習したり、テストで間違えた問題を学習したりする子どもの学力が高いという結果が出ています。また、そうした学習方法の指導をしている学校の学力が高いことも、明らかにされています。ただ量をこなせばよいのではなく、自分の学習を振り返って、何が出来なかったのかを客観的に把握することが大事であり、そこから生徒自身が目標を決めたり、どういう学習手段が使えるかを考えたりすることが、学力向上には欠かせません。

**奈須** 学習の基盤である学校生活を安定させることも大切です。その点、青森市立沖館中学校では、生徒と教員との距離が近いことに加えて、教員同士が結束し、学習の基盤を整

えていました(P.8参照)。生徒の生活や生き方にまで踏み込んで学習意欲を引き出していくというのは、日本の先生方のすごいところですね。

## 学力下位層の課題は 学習量よりも学習方略にある

**木村** 課題整理でも示したように、学力上位層と下位層の違いを検証していくと、学習をプランニングする力や、自分の学習状況をモニタリングする力に、大きな差があることが明らかになっています(P.5参照)。学力格差を解消する上で、そうした学習方略にも目を向けていく必要があると考えます。

**奈須** 学習が苦手な生徒は、必ずしも学習をしていないのではなく、学習の方略に課題があるのです。そのため、頑張っても報われない場合が少なくありません。努力するベクトルの方向が間違っているのです。沖館中学校のスタディタイムが成果を上げているのは、教員が生徒の側について、質の高い方法で自学自習を出来ているからだと思えます(P.6参照)。

授業でこれだけ勉強しているのだから、学習の仕方にも身に付いていると思っっている先生方もいらつしやるのではないのでしょうか。例えば、国語では、文章のどの部分に注目して、主人公の気持ちをどう考えるかという方法論が、授業で繰り返し行われています。しかし、



いざ別の文章に取り組もうとした時に読解できない生徒は少なくありません。授業で学んだ手法を自分で使えるようにするために、先生が示した方法を一般化して受け止めることが必要であるにもかかわらず、多くの生徒は、授業中に先生がなぜこの発問をするのか、このような指示を出すのかを分かっていないため、自分のものにする事が出来ていないのです。

従って、生徒が授業で経験したことの意味付けを、教員が明示化する必要があるでしょう。その上で、その方略の何が良いのかという理由までも説明し、実際に自分1人で取り組ませ、効果的であることを生徒自身に実感させるのです。更に、家でもそれに取り組ませて効果を確認させ、今後も続けるように励まします。そのような過程を経験して、初めて生徒の中に正しい学習方略として定着するでしょう。

**木村** 課題整理の図3 (P.5参照) で示したように、「○つけをした後に解き方や考え方を確かめる」という子どもが下位層に少ないのも同じ理由かもしれません。解答解説の答えを見て、単純に○を付けただけ、あるいは×を付けても、どこをどう間違えたのかを確認しない。なぜ自分で○つけをするのかという意味が分かっていないため、ただ「作業」としてやっているの、同じ間違いを何度も繰り返してしまうのです。

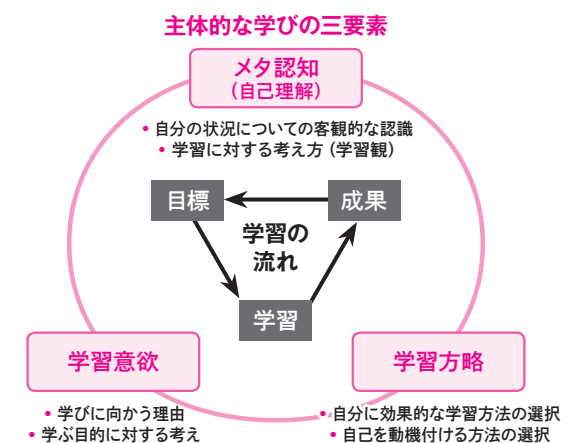
## 学習意欲を高める要因は「自分への期待」と「価値の向上」

**木村** 学校事例では、基礎・基本の定着だけではなく、学習意欲にも切り込んでいた学校が多かったと思います。手厚い補習を行い、生徒に出来る喜びを体験させる立川第一中学校や沖館中学校、表彰制度や検定取得で達成感を味わわせる十文字中学校の取り組みから、学力の定着の土台には、学習意欲の醸成が欠かせないことを改めて感じました。

**奈須** 意欲を高める要因は2つあります。1つは「期待感」、つまり「課題の達成やその手段となる行動をどれくらいうまくやれそうか」に関する自信です。これは認知の一種ですが、立川第一中学校の補習や沖館中学校のスタディタイムのように、強制的に学習に向かう時間をつくり、「授業以外で初めて机に向かって勉強した」「今まで分からなかったことが分かった」「自分でノート1ページの勉強が出来た」といった実感を持たせることで、生徒の中に「やれば出来る」という期待感が生まれ、「もつとやってみよう」という意欲が喚起されるのです。

もう1つは「価値を高める」ことです。十文字中学校の大学キャンパス訪問や社会人講話などの取り組みは、多様な価値観を提示する上で効果的だと思います。勉強して大学に行けばこんな研究が出来る、こんな素敵な人

図 主体的な学びを実現する学習モデル



\*「自己調整学習モデル」を基にベネッセ教育総合研究所で作成

生が待っている。そうした「あこがれ」をつくることによって、学習の価値を高められれば、意欲も高まるのです。

**木村** 十文字中学校の「文中寺子屋塾大賞」のような表彰制度 (P.17参照) は、今ではほとんど聞かなくなったように思います。上位層向けの取り組みですが、どの生徒にとっても学習意欲につながるものではないでしょうか。

**奈須** 報酬は、それが絶対に得られないと分かっている生徒には「罰」として機能する怖さがあります。しかし、表彰する中身が、「社会において、どういう生き方やあり方に価値があるのか」ということを伝えるメッセージになっていけば、多様な価値観を伝える情報としてとても有用です。

十文字中学校では、「十文字中学生のモデル

## 広がる学力格差への多様な取り組み



としてふさわしい人物」を基準にしています  
が、そうした学校が考える価値をどのくらい  
豊かに明示できるかが、取り組みの鍵になる  
でしょう。例えば、成績は良くななくても、い  
つも先生をてこずらせるような質問をした、  
提出物はいつもいちばんに出したという生徒  
を表彰してもよいと思います。多様な観点で  
問いを持てる人、約束事をきちんと守る人は  
立派であるというメッセージになり、知識一  
辺倒の学習観を変えるきっかけにもなるかも  
しれません。

### 学習の本質は 「知識習得」の先にある「意味理解」

**木村** 学校事例では主に授業以外の取り組み  
を取り上げましたが、学力格差を解消するた  
めの王道はやはり授業改善だと考えます。事  
例校も含めて、多くの学校で学び合いや習熟  
度別授業など、さまざまな実践が工夫されて  
います（P.19参照）。格差の解消という観点  
から、今後の授業改善の方向性について、ご  
意見をお聞かせください。

**奈須** 今の教育の世界的な流れは、「どこま  
で子どもに任せられるか」というところに力  
点が置かれています。協働的な学びで学習を  
深めていく、正解を覚えさせるのではなく生  
徒自身が意味を形成して思考を深める、教科  
ならではのものの見方や考え方、問題解決の  
戦略を見付けるといった、単なる知識の習得  
ではない広がりを持っています。

学び合いは、教える側になりやすい学力上  
位層にとっては無駄だという方もいますが、  
それは、「正解を導くことが学習、既存の知  
識を身に付けることが学習」と考えているか  
らです。学習とは、皆で意味を形成しながら  
納得するものだ、私は考えます。自分が出  
来たから先に進むということではなく、隣の  
子はなぜ分らないのか、その分らない度  
合いを知りたい、自分が理解した意味をみん  
なに伝えて納得させたい、仲間と一緒に理解

することが出来た。そうした喜びが内発的動  
機付けを高め、より深い学びを目指していく  
というのが、「学び合い」の本当の意味での  
価値ではないでしょうか。最近、数学教育の  
世界で、「答えが出てから本当の授業が始ま  
る」という考えが広がりを見せています。問  
題が解けて終わりではなく、なぜこの解き方  
でいいのか、他人に説明できるところまでを  
学力と見なそうという動きです。

**木村** 生徒たちが充実感を持って学べる授業  
をつくりたいという思いは、多くの先生がお  
持ちです。ただ、学び合いや協働学習が生徒  
の意欲を高めるということを理解してい  
ても、習得型の学習で基礎学力を保障するとい  
う方法論に慣れている先生方が、まだまだい  
らっしゃるのではないのでしょうか。まずは、  
先生方や保護者などの大人が、学力観・能  
力観を変えていく必要があるのかもしれない  
ん。

**奈須** 学習の本質は「知識・技能の習得」の  
先にある「意味理解」です。生徒がもつ意  
味を分かりたい、世界の広がりを知りたい、  
知識がつながって来るのが面白いということ  
を学習の中心に据えることが出来れば、学び  
の概念は大きく変わるはずですよ。先生自身が  
学習の本質を捉え直し、授業を変えていこう  
という意識を強く持つことが、これまで以上  
に求められていると思います。

**木村** 本日はありがとうございました。



奈良県・私立西大和学園中学校

# 多彩な体験で育む グローバル・リーダーの素養

2014年度、文部科学省は高校支援の新事業として「スーパーグローバルハイスクール(SGH)(\*1)」を始めた。国際的に活躍するグローバル・リーダーの育成を目指し、深い教養、コミュニケーション能力、問題解決力等を身に付ける教育活動を重点的に行う56校が指定された。そうした高校に生徒を送り出す中学校では、グローバル・リーダーの卵を育てるために何が出来るのだろうか。

## School Data



### 西大和学園中学校

◎ 1988(昭和63)年開校。校訓は「探究、誠実、気迫」。高校は2002年度から10年以上にわたるSSH(\*1)の指定を受け、2014年度にはSGHの指定も受ける。2014年度に女子中等部を設置。校長 上村佳永先生 / 生徒数 656人 / 学級数 15学級 / 所在地 〒636-0082 奈良県河合町薬井295 / TEL 0745-73-6565  
URL <http://www.nishiyamato.ed.jp/>

「未来の飛行機のカタチ」「フィボナッチ数列とその性質」「カメムシの日本における必要性」「日本語の(景色)を表す言葉」「かんでんダイエット」「勉強とコーヒー」——これらは、西大和学園中学校の3年生が取り組んだ卒業研究のテーマだ。同校では2年生3学期から1年間を掛けて実験や調査をし、1万語程度の論文にまとめるという活動を二十数年前から行っている。

テーマは自由。2年生3学期にKJ法やマインドマップを用いて自分の関心を掘り下げ、疑問に思うことをテーマにする。教員かOBの大学生がTAに付いて助言をするが、生徒が自力で研究するのが基本だ。優秀な研究は卒業式当日、保護者の前で発表する(写真1)。学外のコンクールで受賞するほどの研究もある。一方、3年生の7月になってもテーマが決まらない生徒や、

実験をしても失敗ばかりで、答えがなかなか見付からない生徒もいる。しかし、「それでもいいんです」と上村佳永(よしひさ)学園長は言う。「答えのないことに挑戦するのが大学の研究ですし、社会に出たら自分で課題を見つけ解決する力が求められます。疑問に思うことを解明するという挑戦をし、テーマに深く入り込む。そういう経験をとことんさせて、テストに出ることしか勉強しようとしないうちにガツンと変えたいのです」中学生のうちにガツンと変えたいのです」

### 体験が興味を外へ外へと広げていく

西大和学園中学校は、開校以来、「科学的洞察力、国際性、利他の精神」といったリーダーとして不可欠な資質を育むことを教育目標にしている。きめ細かい教科指導による学力向上だけでなく、多彩な行事を盛り込み、幅広い教養と人間性を育む。生徒に行事の運営を任せて主体性を育むと共に、生徒が得意分野を生かしてそれぞれに活躍し、互いを認める機会になることもねらいとする。

中学校では、特に体験学習に力を入れる。1年生はファームステイ(3日間)、2年生は富士登山(2日間)、3年生はアメリカ語学研修旅行(12日間)が中心だ。他にホタルの観察、天体観測、外国人観光客への通訳体験など、学年団が生徒の状況に

\*1 SSHはスーパーサイエンスハイスクールの略称。将来の国際的な科学技術人材の育成を目指し、理数系教育に重点を置いた研究開発を行う高校を文部科学省が指定





西大和学園中学校・高校 学園長

上村佳永

かみむら・よしひさ 「先生方の意欲を形にし、子どもの可能性を徹底的に追求し、挑戦する学校運営を心掛けている」



西大和学園中学校・高校 教頭

曾我雅俊

そが・まさとし 「みんなを引っ張るリーダーだけでなく、この人でなければと言われるリーダーも育てたい」



西大和学園中学校・高校

丸谷貴紀

まるたに・たかき 国際教育部主任。英語科担当。「失敗は成功への練習。失敗を恐れず挑戦する生徒を育てたい」



上/写真1 卒業式当日の研究発表会では5組が発表。保護者からの鋭い質問もあるという



右/写真2 「ヤングアメリカンズ」は、アメリカ人50人と3日間、歌とダンスのワークショップを行うプログラム。生徒の家庭でホームステイの受け入れも行う

じて企画する。曾我雅俊教頭はこう語る。

「感性が豊かな中学時代にどんどん外に出て、自分とは違う文化や生活、未知の世界を体験し、衝撃を受け、自分を見つめ直し、新たな発見の場になればと考えます」

企業と連携した課題解決型学習を取り入れるのも、そのためだ。2年生では、キャリア教育の1つとして、「コーポレートアクセスコース」を実施。クレディセゾンや大和ハウス工業などの企業から提示される「若者の『あったらいいな』を実現し、お金がぐるぐる回り出す『永久不減ビジネス』を展開せよ!」といった課題の解決策を、グループで考え、中学生ならではの提案をするという活動だ。働くことの意義や経済活動への理解を深め、社会に目を向けるきっかけとなっている。

失敗OK!とにかく英語を使おう!

英語教育は、グローバル人材にとって必須のコミュニケーションツールとして使えるように指導を工夫する。低学年では、英語への抵抗感をなくすためにとにかく使わせるようにしている。国際教育部主任の丸谷貴紀先生は、指導のポイントをこう話す。

「英語が対話の道具であることを肌で感じられるよう、聞く、話す、書く、読む場面を学校生活の中で出来るだけ多く設けています。英語が文法的に違っていたり、発音が変わったりしても、失敗を恥ずかしながら発言しなくならないようにするため、あえて何も言いません。ネイティブの先生にもその点は徹底してもらっています」

1年生では英語圏では一般的なPhonics(\*2)を行い、まず耳から英語に慣れさせる。そして、各行事の感想文を英語で書く。単語のスペルや文法が間違っただけでも、添削はしない。思いが伝わればOKというスタンスだ。文法の授業もあるが、教え過ぎると生徒は文法を意識し過ぎてしまうため、そのバランスに気を配っているという。2・3年生では洋書の多読を週1回行う。単語が数個という絵本に始まり、Oxford Reading Treeシリーズなどにレベルを上げていき、年間で約10万語は読むという。知らない単語が出てきても、辞書は使わず

読み飛ばす。長文読解の時に分からない単語が出てきても、文意を推測することが自然と出来るようになるという。

ネイティブの講師7人は終日常駐。廊下や食堂でも生徒に気軽に話し掛け、行事にも参加する。生徒が自然と英語を話す機会が生まれ、その積み重ねによって英語が日常的なものになると考えるからだ。

このような英語教育に転換して5年が経つが、3年生でのアメリカ語学研修旅行では、生徒に劇的な変化が現れた。

「ホストファミリーから『以前は話し掛けても答えが単語で返ってくるだけ』と嘆かれていましたが、今では『生徒から積極的に話し掛けてくれ楽しい』と聞いています。外国人相手でも気後れせず、英語を話せるようになっていたのです」(曾我教頭)

本学園の高校はSGHの指定を受け、高校1年生がアジアを訪れ、企業や大学の協力を得て、貧困など現地の課題に取り組むフィールドワークを計画している。進学後、それらの活動に主体的に取り組むためにも、中学段階からの意識涵養と英語力育成が欠かせないと、上村学園長は強調する。

「中学校での意識涵養が、高校での経験に結び付き、更に大学での研究、社会での飛躍へとつながると考えます。本校での経験を糧に、日本人らしく世界で活躍する人材に育ってくればと期待しています」

\*2 発音と文字の関係性を学ぶ音声学習法。英語圏の子どもや外国人に英語の読み方を教える方法として用いられている

# グローバル社会を生きる子どもたちへの英語教育で大切なこと

ベネッセ教育総合研究所  
「中高生の英語学習に関する実態調査」の結果から

文部科学省が2013年12月に発表した「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」では、小学校英語の拡充強化、中学校における授業の英語での実施など、「小・中・高の各段階を通じて英語教育を充実」し、児童・生徒の英語力の向上が目指されている。未来を生きる子どもたちにとって、今後のよりよい英語教育のあり方を探るため、現在の中学生の英語学習の実態や意識について、ベネッセ教育総合研究所が実施した調査結果を基に検証する。

出典◎ベネッセ教育総合研究所「中高生の英語学習に関する実態調査」（2014年3月実施。全国の中学1年生～高校3年生6,294人が対象）。

調査結果はベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでご覧いただけます。

英語を好きにすることが将来、英語を積極的に使うイメージにつながる

文部科学省は英語教育の改革を検討していますが、生徒たちも9割以上が将来、何らかの形で英語が必要になると感じています。しかし、自

分が英語を使うイメージを持つ生徒は、半数強にとどまりました（図1）。人によって度合いが違うとはいえ、中学校段階で「英語を使うことはほとんどない」と4割以上も思っていることは、グローバル社会が進んでいく中では大きな課題といえます。



ベネッセ教育総合研究所  
グローバル教育研究室  
研究員  
福本優美子  
ふくもと・ゆみこ

◎英語教育領域の研究を量的研究と質的研究の両側面から行う。「第1回中学校英語に関する基本調査」「第1回小学校英語に関する基本調査」などを担当。

一方で、将来の自分について、より高度に英語を使うイメージを持つ生徒ほど、英語を「好き」な割合が高いことが分かりました（図2）。英語を好きなことが、将来、英語を積極的に使うイメージにつながりやすいといえそうです。

そこで、英語に関する意識を見ると、英語を「好き」な生徒ほど、「文のつくりやくみが面白い」「音やリズムが面白い」と感じています（図3）。将来、英語を「使う」イメージと同様に、あるいはそれ以前に、英語の学びそのものに楽しさを感じさせることが、英語を「好き」にさせ、更に英語を「使う」イメージが湧く上で重要になるようです。

中学校の英語教育改革では、「授業は英語で」という新たな取り組みが求められています。しかし、英語教育のあり方を大きく変えることばか

図1 将来の「英語の必要性」×「自分が英語を使うイメージ」

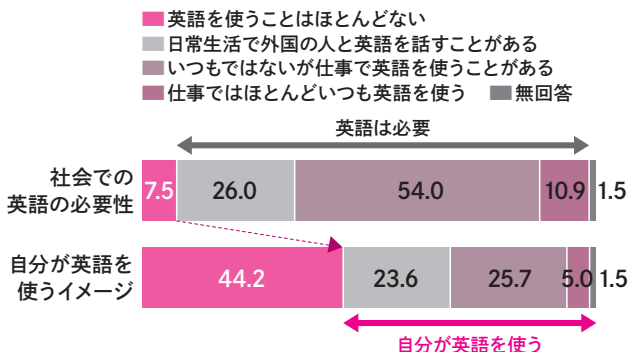
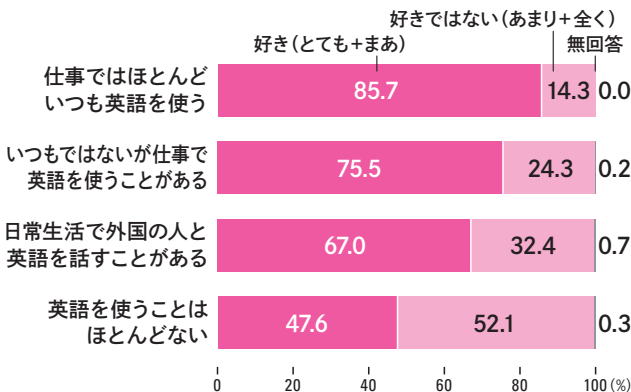


図2 将来の「自分が英語を使うイメージ」×「英語が好き」





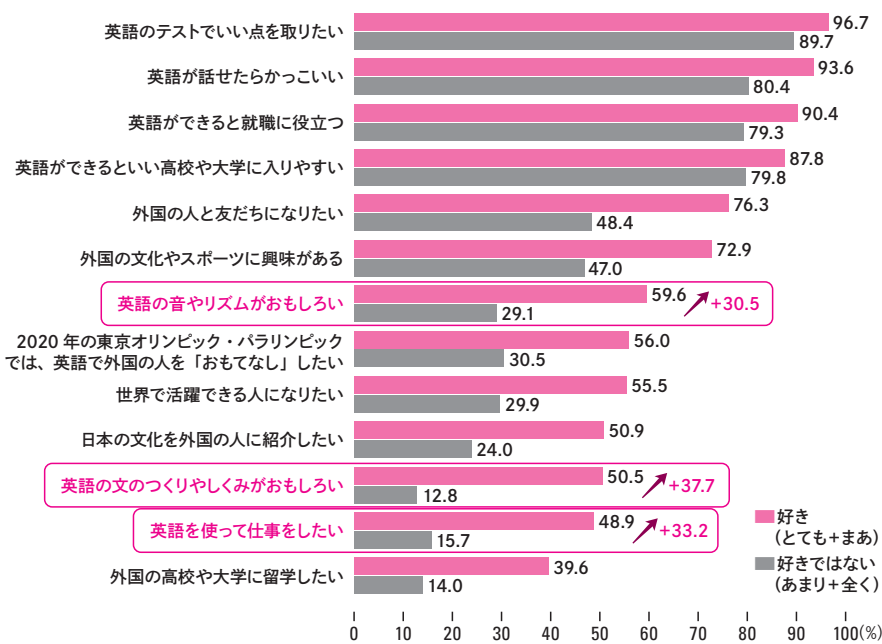
りではなく、文のしくみを楽しく理解できるよう工夫したり、音読で英語の音の面白さを感じさせたりなど、今の指導をより面白くすることで、生徒の「好き」を高めていくことが大切ではないでしょうか。

**「書く・話す」機会を増やし  
英語を使う活動につなげる**

ただ、日本の中学生を取り巻く環境には、実際に英語を使う場面がまだ少ないのが現実です。授業や予習・復習は、生徒が英語に触れる貴重な機会となっています。ところが、授業内容を見ると、「和訳・暗記・解説・問題演習」などは学年に関係なく行われているものの、「自分の気持ちや考えを英語で書く・話す」などの英語を「使う」活動は少ない上に、中学2年生をピークに、学年が上がるにつれて減少しています(図4)。

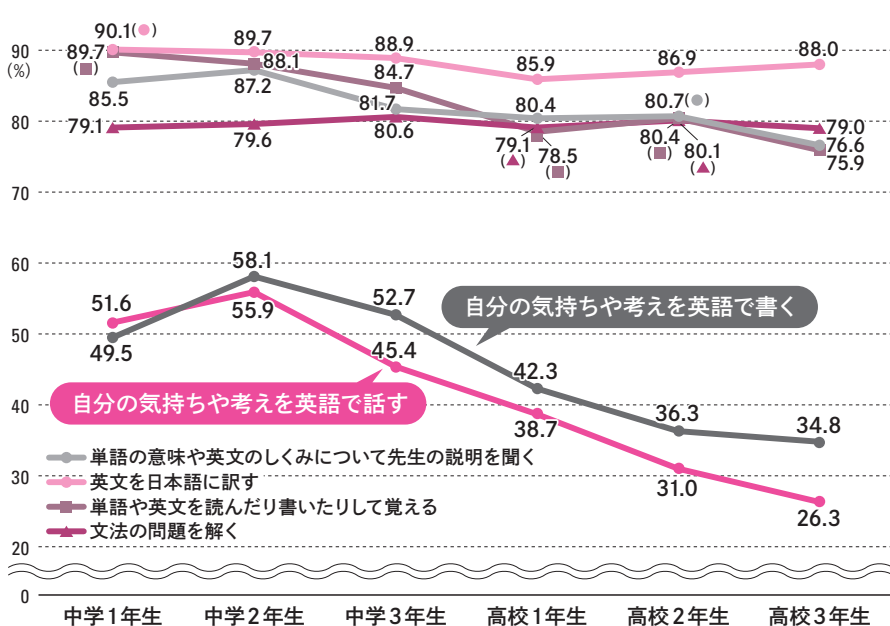
- ・ 単語の意味を調べる(55.5%)
- ・ 教科書本文をノートに写す(47%)
- ・ 教科書本文を和訳する(34.3%)
- ・ 復習で多い学習法はこの3つです。
- ・ 問題を解く(66.5%)
- ・ 単語練習(65.4%)

図3 「英語に関する意識」×「英語が好き」



注) 赤字で囲んだ項目は、「好き」と「好きではない」とで30ポイント以上差のあった意識

図4 授業でしている学習



注) 「よくしている」+「ときどきしている」の%

・ 教科書本文やキーセンテンスを覚える(39.9%)  
「英語で意見や感想を書く」は、予習・復習を合わせても18.2%しか行われていませんでした。  
授業でも、予習・復習でも、「書く」「話す」など、英語を「使う」機会を増やすことが重要です。「使う」こと

が少なければ、「英語を使うとはどういうことか」という感覚を持ちにくく、将来使うイメージが湧かないのも当然です。生徒が中学校で英語を使う機会を増やし、その必要性を伝えると共に、「具体的にどう使うのか」「何に使うのか」「使えたらどうなるのか」についてもイメージさせる機

会を与える必要があると考えます。本調査では、英語の好き嫌いや得意不得意に関係なく、多くの生徒が「英語が話せたらカッコいい」と感じていることも分かりました。生徒が持つこの意識にも期待し、今後の英語教育改革、そしてグローバル化に取り組んでいけたらと思います。





ミドルリーダーの挑戦  
—前へ! 前へ!!

# 生徒に寄り添いつつも、教え過ぎず、自主性や協働性を育てたい

滋賀県 大津市立仰木中学校 **高塚将吾** 30歳



## Middle Leader

たかつか・しょうご◎教職歴7年。大津市立志賀中学校に勤務後、同校に赴任して4年目。担当教科は理科。研究主任、2学年担任。学生時代にバレーボールに打ち込んだ経験を生かし、女子バレーボール部の顧問を務める。

これまで私が歩いてきた道のり

**授業が成立していないのに  
指導方法を見直さず  
空回りしていた**

新任当初は、体育会系の熱血教師を目指し、生徒に真正面からぶつかり合う日々でした。授業でも自分の考えを貫き、2年目から、大学時代に研究していた「学び合い」を、授業に取り入れ始めました。授業の冒頭に示す目標の達成に向け、生徒が教室内を自由に歩いて友だちと学び合う。目標を到達したら、黒板に名前を書き、他の生徒の教え役に回る。そして、時間内に黒板に全員の名前を書くことを目指す——。生徒が協

力して目標に向かう過程で、自主性や協働性が育つと考えたのです。

ところが、授業は思い描いていたようには成立しませんでした。目標を達成した生徒は、それで満足して教える側に回らず、出来ない生徒は早々にやる気を失ってしまったのです。ある日、リーダー的な生徒から「先生の授業はイヤ。何も身に付いてへんよ」と言われた時も、自分が正しいと信じて疑わず、「いつか生徒は分かってくれる」と方法を変えませんでした。

しかし、状況は全く変わりませんでした。仕方なく、大学時代の恩師に相談すると、「生徒に謝りなさい。

誰のための授業なんだ」と叱られました。その言葉で我に返った私は、「君たちを無視した授業をしてしまっ、すまなかった」と謝罪し、講義中心の授業に改めると、生徒は落ち着いて学び始めました。

**最初に思いを伝えると  
生徒の心に届いて  
学び合いが活発化した**

ただ、自主性や協働性を育みたいという思いはずっと持ち続け、翌年、再び学び合いを取り入れたのです。前年の反省を踏まえ、年度初めに「全ての生徒を大切にする学校・学級でありたい。だから、君たちも互いを大切に思い、学び合ってほしい」と理念を丁寧に伝え、生徒が取り組みたくなるような課題を設定し、生徒の気持ちに寄り添った支援を心掛けました。すると、次第に学び合いが活発になっていきました。以前、学び合いがイヤだと言っていた生徒も「皆で頑張ろうや」と学級を引っ張ってくれ、生徒全員が授業時間に目標を達成できるようになったのです。

自信を得た私は、学び合いを学級の外にも広げたいと思い、翌年、3年生が1年生の定期考査の学習をサ

ポートする合同授業に挑戦しました。3年生に相談すると意欲を見せて、熱心に1年生に教えてくれました。分らない内容を一緒に考えて教える3年生の姿から、「皆で高め合おう」という思いを共有できてい

### 今、私が踏み出そうとしている新たな一歩

## 教員の同僚性があってこそ 生徒の豊かな人間性を 育てることが出来る

今、研究主任という立場になり、大切にしているのが教員の同僚性です。学び合いがうまくいかなかった時、同僚の先生方がとても心配してくれていました。しかし、悩みを打ち明けることが弱さと思っていた私は、「大丈夫です」としか答えませんでした。生徒に協働性の大切さを教えようとしていた私自身が、それを信じていなかったのです。

再び学び合いに挑戦しようと授業改善を進める中で、先生方に多くのアドバイスをいただきました。学年主任は「自分が責任を取るから、正しいと思うならやり続ける」と勇氣

ることを強く感じました。

今年度は、学年全体で協力することを目指しています。他の学級の友だちにノートを見せたり、課題のヒントを与えたりする「教え合い」を中心に進めています（コラム参照）。

付けてくださいました。そうした経験から、教職員全員が思いを1つにすることによって、生徒を豊かな人間に育てられると考えるようになりました。

同僚性を育むために、私は雑談を重視しています。信頼関係は、何百、何千の会話を通して育つと思うからです。「Aくんがどこそこで何をしていたよ」というように、先生や職員の方との何気ない会話を通して生徒の気になる様子を知らされ、指導に結び付いたことも多々あります。

一方、最近気に掛かっているのは、生徒に「飢餓感」がないことです。パソコンや携帯電話などモノは何でもそろい、授業、部活動、塾と、毎日すべきことも与えられています。常に「満腹感」があり、自ら何かをし

ようとする気持ちが薄いようです。そこで、私は、生徒に教え過ぎず、指示し過ぎないようにして、「自分から動かなければ」という気持ちにさせ、「学びたい」「やってみよう」という主体性を引き出そうとしています。私は極力話さずに、生徒が自分たちで学び合いをしないと進まないような授業を心掛けています。また、部活動では、生徒に練習内容を

選ばせ、自分たちで練習を進めさせています。

いつでも生徒の心に響く言葉を掛けられるように、感受性を磨く努力も続けています。これまで興味のなかった心理学や経営学を学んだり、芸術に触れたり、教育という枠を超えて広い世界を知ること、多様な個性を持つ生徒たちに寄り添える教員でありたいと思っています。

## クラス別達成表

### 高塚先生の取り組み

◎学級内の学び合いは出来てきているので、次は学年全体、学校全体へと広げたいと考えています。理科室に学級別の達成表を掲示し、各学級の課題やテストの到達状況を単元別に共有しています。「このクラスが苦戦しているから教えたい」といった気持ちが起きればと期待しています。

	1 1 時 課題	2 時 課題	3 時 課題	4 時 課題
1	●●●●	●●●●		
2	●●●●	●●●●		
3	●●●●	●●●●		
4	●●●●	●●●●		
5	●●●●	●●●●		
6	●●●●	●●●●		

各学級の状況が見えるようにしたことで、学び合いの意識が高まった。他学級の支援を受けて達成できた学級の生徒が「次は自分たちが教えよう」と奮起する姿が見られるという

# ワークショップ型の校内研修で 同僚性を育み、学校力を高める

「いつもの会議」から一歩抜け出し、「気軽にまじめな話をする場」を設けることで、同僚の先生たちが「多彩な同志」であることを認め合い、支え合うような関係をつくっていきませんか。ベネッセ教育総合研究所主催「Teachers' cafe」(\*1)の企画・運営に携わり、組織の風土改革を専門とする株式会社もくてきの與良昌浩氏に、同僚性を育み、学校力を高める研修法を聞きました。

楽しく、まじめに対話する場を通して課題解決や未来創造に自ら動き出せるように

2013年度に行った「Teachers' cafe」では、「意識の高い先生が集まり、校種や立場が関係のない特別な環境だから、参加者は自由に話せるのだ」という声も聞かれました。確かに、同じ手法を自校で行うことは難しいと思われるのは当然です。しかし、実際には、隣の席の人でも自分のことを語り合う機会は少なく、このようなワークショップを通じて初めて「そんなことを考えていたんだ」と驚かれる場面を数多く見えました。

うまくいかないかもしれない。でも、そうした課題意識を持ちつつも、まずは実践してみることが大切だと考えています。失敗したら次の方法を考える、うまくいったら繰り返しやってみる。何かをやり、積み重ねることで、学校という組織も確実に変化していきます。

次ページでは、ワークショップを2回に分けたケースを紹介しています。1回目は、同僚性を育むことに注力し、安心して話せる環境をつくる工夫をしています。最初に行う「ジブンガタリ」(\*2)では自分のことを話すので、聞き手は批判のしようがありません。そうすることで、「自分を受け入れてくれる」という感覚をつくっているのです。更に、思いや悩みを共有することで、人は心の

距離が縮まります。そうして人のつながりの質を変えていくのです。

2回目のワークショップは、課題認識とありたい姿を共有することに注力しています。解決策はその糸口が見付かれればよい、くらしいの気持ちで話し合うのがポイントです。なぜならば、一度思いを発散させておくことで、決定事項に対して、たとえ自分の考えが反映されていなくても納得し、その実行に力を尽くせるからです。一見、生産性のないワークショップでも、一人ひとりの意欲を高めるためには効果的なのです。

発散の過程では、混沌や混乱が見られるかもしれませんが、収束への過程の1つとして必要なものと捉えてください。「言いたいことを言い、疑問を解消し、新たな気付きを得て、結果的に課題解決へと自ら動き出す」そうしたワークショップの目的を、最初に説明するとよいでしょう。

ワークショップ型の学びは、大学の授業や企業の研修に盛んに取り入れられており、子どもたちが今後経験していく学びの形態の一つです。教師としてそうした新しい学びを体験するという意味でも、このワークショップ型の研修をぜひ取り入れてみてください。

実践レポートをお寄せください！ 応募者から  
抽選で100名様に書籍をプレゼント

校内でワークショップ形式の研修をどのように行ったのか、ご報告をお待ちしております。ご報告をいただいた方の中から抽選で100名様に、Teachers' cafeの監修をする與良昌浩氏の最新著書『他人の思考の9割は変えられる』(マイナビ新書)をプレゼントいたします。ご応募は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイトからお願いします。

<http://berd.benesse.jp/tcafe/>

Teachers' cafe ベネッセ で 検索

締め切り  
2015年1月9日(金)着

\* 『これからの幼児教育』『VIEW21』小学版・中学版へのご応募から抽選で100名様にプレゼントいたします  
\* 当選者の発表は商品発送をもって代えさせていただきます(お届けは2015年2月上旬を予定)  
\* 商品のお届けは、応募された方の勤務校宛となります。ご自宅への発送はいたしかねますのでご了承ください



株式会社もくてき代表取締役  
株式会社スコラ・コンサルタント プロセスデザイナー  
與良昌浩  
よら、まさひろ

大手商社 大手コンサル  
ティング会社などを  
経て現職。

\*1 Teachers' cafe 当日の様子については、Teachers' cafe ウェブサイトをご覧ください。<http://berd.benesse.jp/tcafe/>  
\*2 「ジブンガタリ」は、(株)スコラ・コンサルタントの登録商標です



## 1回目 関係性を深める 時間のめやす 60分

- 3～4人ずつのグループをつくります。少人数の方が、一人ひとりが話す時間を多く確保でき、自分の思いをしっかりと語れます。議論ではなく、「対話」を心掛けます。• ファシリテーター（進行役）を決めましょう。

### 1 目的の共有、ルールの確認 5分

- ◎ 今回のワークショップの目的を共有します。  
例：「応援し合えるヨコの関係性をつくるために、まず自分自身のことや今思っていることを語り合ってみましょう」
- ◎ 話し合いのルール「ワークショップで大切にしたいこと」を確認します。

#### ワークショップで大切にしたいこと

- 1 自分の感じていることを素直に話す。人が感じていることに良い・悪いや正解はない!
- 2 相手の話を真剣に聴く。好奇心の矢印を相手に向けよう!
- 3 評価・否定・批判はしない。合いの手、うなずき、笑顔、大歓迎!
- 4 同じ目線で一緒に悩み考える!
- 5 ここでの話を他人に言ったり、偏見を持ったりしない!

### 2 自分を語る 1人8分×人数

- ◎ 自分が思っていることを好きなように語ります。とにかく思いつくだまに話し出すことで、自分の考えや思いが整理されていくこともあります。
- ◎ 8分間は、話す人が主人公になる時間です。語り終えたら、聴いている人は質問をしたり、感想を伝えたりしましょう。

- ◎ 1回目は、各人の思いや考えを存分に発散させ、互いのことを深く知り合います。安心して話すことの出来る関係性をつくることで、2回目の議論や普段の会議が活性化していきます。

**ジブンガタリ**> どうして先生になったの? 先生になってうれしかったこと、失敗は?

**モヤモヤガタリ**> 指導する中で感じるモヤモヤ(違和感・疑問)は?  
**ミライガタリ**> 子どもにどうなってほしい? どんな先生になりたい?

### 3 気付いたことのシェア 1人2分×人数

- ◎ 各人のジブンガタリを聴いて、自分が気付いたこと、学んだことをグループ内で発表し合います。ほかの人の気付きを聴くことで、視野が広がりますし、自分の学びの確認にもなります。

### 4 今日の気付きを書き留める 5分

- ◎ 今回のワークショップで自分が気付いたことや学んだことを、メモ用紙に書き留めます。きちんと文字にしてアウトプットすることで、更に気付きが促されます。

### 5 次回、話し合いたいテーマを挙げる 10分

- ◎ 次回、みんなと話し合いたいテーマを、一人ひとりメモ用紙に書きます。参加者全員で見せ合います。参加人数が多い場合は、テーマが近い者同士、3～4人のグループをつくり、次回はそのメンバーでグループワークを行います。

## 2回目 課題解決への意欲を高める 時間のめやす 60分

- 1回目の最後に、話し合いたいテーマをつかったグループで集まります。
- ファシリテーター（進行役）を決めます。発言していない人がいたら、話すように促す配慮が必要です。

### 1 目的の共有、ルールの確認 5分

- ◎ 今回のワークショップの目的を共有します。  
例：「今回は、前回出てきたテーマについて議論を深め、これからしたいことについて目線を合わせたいと思います」
- ◎ 「ワークショップで大切にしたいこと」（上記参照）を確認します。1回目と同じだからと省略せずに、再度伝え、話しやすい雰囲気を作りましょう。

### 2 テーマについて現状を共有する 15分

- ◎ 各人がテーマについて思っていることを自由に話しましょう。それぞれの思いなので、ばらばらでも構いません。模造紙などに書いていきます。
- ◎ 要望や期待、不満なども出てきますが、現状を共有することが目的です。事実と意見を分け、また、他の人の発言を否定しないようにしましょう。
- ◎ 発言していない人がいたら、話すように促してみましょう。ただ、発言したくない場合は、パスも認めましょう。

- ◎ 2回目は、1回目で見いだしたテーマについて議論します。テーマに対する一人ひとりの思いを発散させ、みんなの思いを束ねていくことで、目的を共有し、課題解決への意欲を高めていきます。

### 3 テーマについてありたい姿を話し合う 15分

- ◎ 現状を共有した後は、テーマについて、どうあったらよいのか、考えを出し合います。理想でも、期待でも、実現が難しそうなことでも、思っていることは発言してみましょう。

### 4 話し合ったポイントを言葉にまとめる 10分

- ◎ ありたい姿に近付くために重要だと思うポイントをまとめます。絞り切れなければ、仮で決めても構いません。テーマに対してなるべく端的に言い表せるように、グループでまとめていきます。

### 5 全体で話し合ったことを共有する 10分

- ◎ グループが複数ある場合は、各グループで話し合った内容を全体で発表し、共有します。模造紙などを見せながら発表するとよいでしょう。

### 6 これからやってみたいことを書く 5分

- ◎ 今回のワークショップで自分が学んだこと、テーマについて今後、自分でやってみたいことを文字で書き留めます。今回のワークショップで得たもの、思いを大切にしましょう。

## 2014 Vol.1 特集「言語活動を通じて高める生徒の力」へのご意見

このコーナーでは、編集部寄せられた読者の先生方からのご意見をご紹介します。

\*『VIEW21』中学版のバックナンバーは「ベネッセ教育総合研究所」ウェブサイト(<http://berd.benesse.jp/>)でご覧いただけます。

◎新学習指導要領の軸であった「言語活動」も、移行期の流行の段階から、日常的な不易になってきたと感じています。そこで見えてくるのは、生徒に付けたい力をしっかり押さえたいれば、必然的に思考力重視の授業となり、言語活動を伴うものになるということです。「なぜ言語活動なのか」を忘れてはいけません。[静岡県/A中学校]

◎東京女子体育大の田中洋一教授の「一人で考える時間が活動を深める」という言葉が心に残りました。教員側から考えると、常に生徒が活発に学習活動に取り組んでいる授業を期待し、自ら学ぶ姿勢の中で一人で考えるという活動は見落としがちです。これを抜きに他の学習活動はあり得ないと思い、とても納得しました。考える活動は目に見えませんが、考えを発表したり発信したりすることにつなげたいと思います。[岡山県/C中学校]

◎東京都立川市立立川第二中学校の取り組みに共感しました。自信のない子どもが多い今、「根拠」に基づき、論理的に考え、表現する力を養うことは、とても良いことだと思います。本校でも取り組みたいと思いました。[東京都/D中学校]

◎近年、自分自身も社会科の授業を構想する上で、生徒が必要感をもって解決に向けて迫れる課題を設定するように心掛けています。佐賀県小城市立三日月中学校の真子先生の定期考査は、日頃の学習課題を生かした内容で作成されていて、参考になりました。[富山県/F中学校]

◎研究報告で述べられていた、生徒へ問い掛け続ける大

切さは私も同感です。しかし、つい我々教員は正解となるような返答を求めがちなこと事実です。正解に結び付くのだろうかと思ってしまう生徒からの表現(返答)こそ、むしろ教室内を考えさせる雰囲気にし、言語活動が活発になるという側面もあるのではないのでしょうか。今後も、教員の器の深さや幅の広さが求められると思います。[東京都/T中学校]

◎教育の目的は、生徒の良さを引き出すことだと思ってきました。「私を育てたあの時代、あの出会い」を読み、その手段の1つとして、「地域にかかわらせること」の大切さを改めて感じました。土日は部活を理由に、生徒がボランティアや地域行事へ参加することを見送ってききましたが、改善していこうと思います。[新潟県/Y中学校]

◎教員を長年して感じるのは、時間を超えて同じ課題が繰り返されることです。20年程前、授業でのパソコン活用が全国で盛んに行われました。「Benesse発 これからの教育」にもあるように、今また、ICTの時代が来ています。過去の実践や研究を土台にした、新たな展開が求められていると思いました。[新潟県/D中学校]

◎「ミドルリーダーの挑戦」の石川和代先生の記事は、私が思っていること、大切にしていることと非常に近く、自分のことを書かれているかのようで驚きました。授業と学級経営(特活)の連動は、もっと注目されるべきことだと思います。その仕組みが広く伝わり、若手の先生方の力になることを、心から期待します。勇気と活力をいただきました。[岡山県/S中学校]

## 子どもは未来

ベネッセ教育総合研究所は、  
子どもたちの成長に寄り添う研究と  
社会への発信を通して、  
一人ひとりが学びに向かい、  
今と未来を“よく生きる”ことに  
貢献することを目指しています。

ベネッセ教育総合研究所

## 編集後記

8月に公表された「全国学力・学習状況調査」では、「全国平均と下位層の差が縮小」という結果でしたが、これはあくまで県平均の数値。学校単位、クラス単位で見ると、学力格差はまだ大きいとお聞きます。更に、今号の取材を通して、学力だけでなく、心身面や家庭環境等で多様な生徒が通う公立中学校における一斉指導の難しさを、改めて痛感しました。今号が少しでもご参考になればと思います。

ベネッセ教育総合研究所 情報編集室『VIEW21』中学版編集長 草場隆志

VIEW21 中学版 2014 Vol.2

2014年10月6日発行/通巻第322号

発行人 谷山和成  
編集人 小泉和義  
発行所 (株)ベネッセホールディングス

◎お問い合わせ先

情報編集室  
〒206-0033

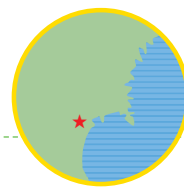
印刷製本 凸版印刷(株)  
編集協力 (有)ペンダコ  
執筆協力 二宮良太、中丸満、長谷川敦  
撮影協力 荒川潤、川上一生  
イラスト協力 カモ、幸剛

東京都多摩市落合1-34  
電話 042-311-3390

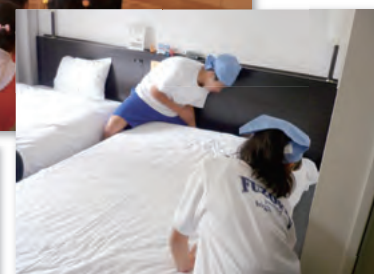
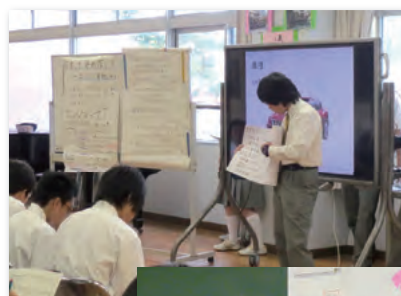
© Benesse Holdings, Inc. 2014

色とりどりの学びの情景

## 生き方に迫る体験学習



表紙の学校 宮城県 宮城教育大学附属中学校



1年生の3日間の職場体験は、幼稚園、ホテル、鉄道、新聞社、橋やダムの記事事務所などさまざま。2年生は2泊3日で山形を訪れ、民泊をしながら、農業、漁業、観光業、食産業などを体験し、地元の生活と文化を肌で感じる

全校発表会では、ポスターセッション、電子黒板を活用した発表、体験してきたことの実演など、班によってさまざまな工夫が見られた。聞く側は、発表から学んだ点や良かった点を「視聴カード」に書き、その班に渡す。発表会の準備は学年縦割りで行うため、学習の流れが生徒間で受け継がれている

宮城教育大学附属中学校では、昭和48年から「総合学習」として人々の生き方、考え方に触れる調査研究・体験活動を進めてきた。現在は「総合的な学習の時間」で、1年生は仙台市での職場体験、2年生は山形県での民泊と調査研究・体験活動、3年生は東京・神奈川での調査研究・体験活動を行う。生徒は学年が上がるにつれ活動範囲を広げながら、それぞれの地域で仕事を体験し、そこに住む人々がどんな思いで働

ているのか、喜びや苦勞などを聞き、生き方に迫る。関心が同じ生徒同士が学級横断で班を作り、事前に体験先について徹底的に調べ、講師への質問を考える。体験後は活動内容と研究結果をまとめ、全校発表会で報告する。どの生徒も「仕事にこだわりを持つことや、郷土のために貢献することの重要性を感じた」という。学校を飛び出した体験は生徒の考えを少しずつ揺さぶり、社会参画の実践力を育成する。

過去1年間の  
特集テーマ

Back Number

2014

Vol.1 言語活動を通じて高める生徒の力——新教育課程の中間総括として

2013

Vol.3 1人で学べる生徒を育てる

Vol.2 生徒の心に火をつける

Vol.4 社会を生きる力を育む——キャリア教育の視点で教育活動を捉え直す

すべての記事をウェブサイトからPDFでダウンロードいただけます

<http://berd.benesse.jp>

または

ベネッセ 研究

で

検索

次号 Vol.3 は 2015年2月発行(予定)です